

---

# 転生しちゃいました

寒プリズム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生しちゃいました

### 【Nコード】

N9745N

### 【作者名】

寒ブリズム

### 【あらすじ】

神様の退屈しのぎに転生させられた主人公が、リリカルなのはの世界で頑張るお話です。

オリ主、最強物です。稚拙な文章なため見苦しい点が多々あると思われるかもしれません。それでもいい方はどうぞ！

## 第一話（前書き）

見苦しい点多多あるかと思われます。それでもよければ。

## 第一話

突然パチリと目が覚めた。

明日からのテストに向けて必死の勉強（一夜漬け）をしていたはずなのに、どうやらいつの間にか眠っていたようだ。

……それもしっかり横になつて。

『やつちまつた…』という冷や汗がブワツと吹き出して来た。

今回のテストで赤点とると単位がやばいつて言うのにつ！

冷や汗をかきつつバネ仕掛けの人形のように跳ね起きた俺は、そこでようやく周りの様子がおかしいことに気が付いた。

「……どこだよ…。」

目が覚めたらあたり一面真っ暗な場所だった。

いや、真っ暗というよりは、そこは真っ黒に塗りつぶされた世界だった。

ただ、その真っ黒の世界の中にも一つだけ明るい色をもったえらく目立つ物があった。

それは白地に、黒字で文字を書かれた立て札だった。

立て札にはこう書いてあった。

『分岐点』

……… 分岐点？なんのことだ？

意味不明な立て札に頭にハテナを浮かべていた俺はいつの間にか手に紙を持っていたことに気が付いた。……こんな紙さっきは持っていなかったのに。

『お前は死んだけど、わしは優しいから選ばせてやる。転生するかこのままあの世に行くか。』

……ッッッどころが多すぎてどこから手をつければいいのか。

そうだな、とりあえずッッコムベきは…

「字が汚すぎるだろ！！！」

『いやいや、さすがに最初にそこをツツコムのはおかしいと思うぞ。わしでもドン引き。』

気が付けばさっきの紙に新たな文章が書き足されていた。

いやー、だって気になるじゃん。なんか達筆そうにごまかそうしてる感じがもう手がつけれないぐらい壊滅的なことになってるし。

ちなみに、俺は頭はあんまり良くないが字だけは綺麗だ。

クラスのとつらにも、お前は字だけはきれいだよなーとよく言われる。余計なお世話だ。

『わしは何者かとか、なんで死んだのとか色々あるだろ。』

思考を脱線していたら、また紙に新たな文章が書いてあった。んー、これは聞いて欲しいって事だろうな…

「えっと、それじゃあなたはどこのどなたでしょうか？」

『わしは神じゃ。えっへん。』

えー…えっへんとかないわー…。

「それじゃなんで俺は死んだんでしょうか？」

『わしが退屈だったから。ということで転生する方を選ぶ。』

「は？」

意味が分からなくて、思わず間の抜けた声がでてしまった。

『だから、わしの暇つぶしにお前を転生させて、転生したお前がやりたい放題するのを楽しむんだよ。』

なんなのこいつ…。こんな紙切れじゃなくて、目の前にいたら鉄拳制裁を食らわせてやるのにな…。

「転生って具体的にはどんな…？」

『とりあえずはバトルものの漫画とかアニメの世界にいつでもおうかな。そこで思う存分俺TUEEEを楽しんでくれ。』

もうなんかいろいろひどいな。

「そんなの俺に出来るわけないだろ。MOBキャラで終わるのが落ち。」

『心配はいらん。転生にあたって色々オプションをつけさせてもらうぞ。』

「たとえば？」

『それは転生先による。どこがいいんだ？それも選ばせてやる。』

まだ一言も転生するとは言っていないんだが、すっかり転生することが前提になってるな。

まあ、結局は転生するんだけどな。いきなり人生終わりなんて納得いかねえ。

「そうだな。それじゃリリカルなのは世界とかがいいかな。」

魔法とデバイスはかつこいいよな！あと使い魔も欲しいな。

『なかなかいい世界を選ぶではないか。では魔法と武術素質は当然として、軍略的素質も役に立つだろうな。あと発明素質もあると便利だな、デバイスとか自分で作ったほうがおもしろいだろ。』

しかしノリノリである、この神様。

これだけ色々もらえばMOBで終わるってこともないかな。

『さて、それじゃ転生させるぞ。ちなみに、わしは素質を与えただけだからそれを活かす為に努力するんだぞ。わしを失望させるなよ？』

は？え…ちょ、それってどういうことだーーーー！！！！

……そこで俺の意識は途切れた。

## 第一話（後書き）

ご意見、ご感想おまちしております。

## 第二話

さて、転生したもの…

やっぱり転生っていうだけあって赤ん坊からスタートなんだな…。

いま俺はきつとこの世界での母親であろう人の腕の中でべそをかいている。

いや、生まれたときからしつかり意識があったものだから、泣き声あげなかったんですわ。

でも生まれたての赤ん坊が泣かないのはやっぱりダメみたいで無理やり泣かされました。…この助産師覚えてるよこのやろっつ…。マジ痛いです、はい。

でも母親の腕の中ってすごい安心感があるな…。

本能的にこの人が母親だって感じ取れる。

でも前世(?)の記憶を引き継いでいる身としては死ぬ前の母さんも俺にとっての本当の母親で…。正直複雑な心境になる。

母さんどうしているだろうか。俺がいきなり死んで悲しませているかな…。

ひとしきり大声で泣き喚いたせいか、急に眠気が襲ってきた。

赤ん坊の仕事は寝ることだ。いくら転生したといっても俺も例外じゃない。やなかったらしい。

意識が落ちる寸前見た母の顔は、慈愛に満ちた聖母に見える一方で、何かを決意した戦士のようにも見えた。

さて、転生してから3ヶ月が経った。

未だに能動的に動くことの出来ない俺の世界はごく限られたものといえる。

だが、それでも分かることがあった。

どうやら何らかの事情があつて、俺には父親がいないようだ。つまり、わが母親はいわゆるシングルマザーというやつのようなのだ。

そして、未だに孫の顔を見に来る爺さんばあさんがいないところを見ると、中々に複雑そうな事情があるようだ。

まあ、俺の予想としては悪い男に引っかけた母親が、父親と駆け落ち同然で家を飛び出した方がいいが、その父親は子供が出来たことにビビッて逃げたへたれ野郎だったところかな。

これなら父親も親類と思しき人物が現れないことにも納得がいく。

苦労してるな母さん…。

そんな母さんに負担をかけるようで申し訳ないが、お腹が減ったときやオムツを替えてもらうときなどはどうしても泣いて知らせなければならなかった。

無駄な泣き声はあげていないから、これでも普通の赤ん坊に比べれば相当にマシ…なはずだ。

しかし、無駄な泣き声をあげていない、とは言いつつも名前をつけられたときは相当に泣き叫んだな。

なにせ、わが新しき名前の候補が

『火虎』 『夢想李伊似』 『礼人』 e t c …

いや、あんた俺をどんな人間にしたいんだよ!!!

断固拒否のつもりで大泣きたら、大喜びしているのだと勘違いして『火虎』に決定しそうになったときはホントに血の気が引いたね。

『やっぱりねー。わたしもこの名前がいいと思ったのよ。強そうだし』

この台詞を聞いたときには覚悟を決めた。  
いや、なんのって？DQNネームつけられた可哀想な子供として生きていく覚悟だよ!!!

しかし、それも魂の叫びの籠った泣き声でようやく拒絶の意が伝わったようで、何とか阻止することができた。

そのあとも、『龍』『虎』『燕』『鷹』『鯉』『巨人』とかつけられそうになったりと色々あったが。結局は『涼』という漢字に落ち着いた。

名前の意味としては、なんかクールそうだからだそうだ。

……いや、それ意味じゃないですよ？印象ですよ？？

この名前騒動でわが母はなかなかアレな人だとわかった。

仕草などをみているとどこか洗練された感じの印象をうけるところから育ちは悪くなさそうなんだけれど、ちよっと頭のねじがゆるいみたいだ。

…天然ってやつなのか？

なにせよ、おれの新しい名前が決まった。

『一ノ瀬涼』

これから俺はこの名前で生きていく。

そう思うと中々に感慨深いものがあつた。

さて、前述のように我が家は中々に複雑な事情があるわけだが、世間はそんな事情など顧みてくれるほど甘い場所ではないわけで。やはりこの世の中生きていくには先立つものが必要なわけで。

なにが言いたいかというと、うちの母親は家計を支える為に出産から約3ヶ月経った今日仕事復帰を果たしたようである。出産後の休息というのはもう少し長く取るものだと思っていたのだが、違うのだろうか。…いや、無理をしている可能性のほうが大きいだろうな。

手の掛からない子供を自称する俺相手であつてもやはり子育ては重労働だ。

子育てをしながらの仕事は相当にきついだろう。

母親の心配をする一方で俺にはもう一つ懸念があつた。

母さんが働いている間、息子たるわたくしは一体どうなるんでしょうか。

うーむ、託児所に預けるとかならば、何かと準備が必要だろうに全くそんな素振りが無いところがなんというか…ものすごく不安を掻き立てられる…。

うちの母さんのアレさ具合なら普通に俺のこと忘れていている可能性も無きにしも非ず。

様々な可能性を考えているうちに、母さんの出かける準備が済んだようだ。

どうやら、家に放置ということは無いらしい。

仕事着に身を包んだ母さんは、俺のことをおんぶしてどこかへと歩いていく。

そして着いた場所は中々に大きな一軒家。

っていうかこの家見たことあるぞ…。

母屋と思われる2階建ての日本家屋。そして敷地の面積ではその母屋を上回っているだろう道場らしき建物。

なんというか、すごく高町家でした。

そして、出てくるのはやっぱりあの方、高町桃子さんでした。

うん、やっぱりというかなんと言うか、俺は高町家に預けられることになっていたようです。

なんか話を聞いている感じでは出産した病院が一緒に、そこで知り合い仲良くなって今に到るらしい。

世界って狭いねー。いや、これは『神様』の作為だと考えた方が自然なのだろうか？

っていうか桃子さんが出産…っていうことは。

めでたく未来の魔王様とご対面ー！！

ちよつとした世間話をしたあとにわが母は『遅刻しちゃう！』という言葉とともに仕事場に急行なされた。

そして今度は桃子さんに連れられて高町家に入ってみるとそこには自分と同じくらいの赤ん坊がベビーベッドで寝ていた。

いや、面影といったら栗毛しかないんだけど、どう考えてもなのは嬢だよな？

それにしても、この寝顔といったら凶悪にかわいい。この子は天使です、といわれても信じてしまいそうな勢いだ。これが将来魔王と呼ばれるんだから世の中わからない。…胸が熱くなるな。

と、ここでののは嬢が突然目をパチリと開けてこっちを凝視してきた。

うむ、目をあけていても天使のようだな。

と思っていたのもつかの間、俺をみるとすぐに大泣きを始めるなのは嬢。

うん。傷つく、これは傷つくぞ。初対面でいきなり泣き出される顔って…。いや、まだ鏡で自分の顔を良く見たこと無いけれど、赤ん坊なんてどれも同じような顔…のはずだよな？

「あら、お腹がすいたのかしらねえ？」

と言いつつ俺をなのは嬢と同じベッドの上におろし、入れ替わりになのは嬢を抱っこする桃子さん。

ふむ、どうやら俺を見て泣き出したわけではないようだ。ほっと一安心。

って、桃子さん何してらっしゃるんですかつ！！

気が付けば服をはだけさせている桃子さん。

いや、普通に考えて母乳をあげるんだろうけど、それはダメだつ！！

なにがダメって、俺がダメだ。

母さんのときはちよつと気恥ずかしかつたけれど、まったく邪な気持ちは浮かばなかった。でも、これは不味い！

こちら転生したもので、精神年齢は18歳でして、俗に言う思春期なわけだ。そして桃子さんはすごく若くて、大人なお姉さんって感じで……って自分でも支離滅裂になつてきていると自覚しているけどどうにもできないっ！

――ガチャ

！――！ッ

「一ノ瀬さんの家の子供が来たんだって？」

どうしてこのタイミングでやってくるんだ、高町士郎――！

あうあうあう……、生存本能がこれはヤバイと警報をならしている。

「あら、ノックぐらいしてくださいな士郎さん。」

言葉こそ冷たいが、口調がもうなんというかバカッブルのそれだ。

この桃色空間が苦しい。そして高町士郎が怖いっ――！

と、とにかくここは目立たないようにしてやり過ごすしかない。高町士郎に邪な気持ちの気配を悟られればThe ENDの予感しかない。

クールだ、クールになるんだ――一ノ瀬涼。名前だつてクールそうだから

らって付けられたんだろう？

「ふええ〜」

今の声は何だ。

うむ、間違いなくいまのは俺が発した声だ。

なんということだろう。あまりの恐怖に理性とは乖離して無意識に泣き出そうとしているらしい、俺は。

ああ、前世の母さん、現世の母さん。どうやら俺はここまでのようです。この親不孝者をどうかお許し下さい。

「あらあら、涼君もお腹がすいたのかしら？」

ちょ、ちょっと待ってください桃子さん！？

なにを勘違いしてらっしゃるんですかっ！！

いや、でもいいや。こういう死に方ならば、男として本望だろう……。

まあ結論から言えばなにも無かったんですけどね。

うむ、何事にも動揺しない鋼の心がほしい。でなければこの世界で生き抜いていく自信が無い…。

そんなことを思った生後三ヶ月の一ノ瀬涼でした。

## 第二話（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

### 第三話

転生してから6年が経った。

来年には小学校への入学を控えている。

俺にとって、この6年は長かった。

なまじ精神年齢が高いせいで周りの子供と一緒に遊ぶっていうのは中々に苦勞する作業であつて、当初こそ混ざつていこうと思つていた俺だが、次第に子供達の輪からは遠ざかつていた。

「それじゃ行つてくるわね。」

「忘れ物は無い？携帯持った？ハンカチ持った？」

「もう、涼ちゃんは心配性だなあ。私はそんなにうっかりしてません！」

「…それだと苦勞しないんだけどなあ。行つてらっしゃい、母さん。」

「はーい。いい子にしてるんだよー。」

ただ、一人ぼっちだったかといえそうではない。

「さて、それじゃ俺もそろそろ行くか。」

うつかり者の母を仕事へと送り出してから、あらかたの家事を済ませた後に外出する。

向かう先は翠屋だ。

「おはようございます、桃子さん。」

「あら、いらっしやい涼くん。なのは、涼くんが来たわよ。」

営業中の翠屋に入るとまず桃子さんに迎えられた。

そして、桃子さんに呼ばれたなのは、ついでに土郎さんにも迎えらる。

「りょうちゃん、おはようなの!」

「おはよう、なのは。」

「やあ、涼君。いつも悪いね。」

「おはようございます、土郎さん。僕はただなのはと遊んでいるだけですから...。」

士郎さんが仕事で大怪我をして以降、高町家が大変だった時期。高町家にはなのはの居場所はなかった。

そんな時期に乳飲み子の頃からなのはと一緒にだった俺は自然な流れとして、遊び相手になっっていて、もっと言えば一番傍に居る時間が長い存在になっていた。

士郎さんが怪我してすぐの頃のはは、それはもう見ていられないうぐらい精神的にやられていた。そんな姿を見たのも、他の子供から離れていった俺がなのはの遊び相手になっていた理由だろう。

自分で言うのもなんだが、俺の存在によってなのはは相当に助かっていたと思う。

士郎さんの言葉もその頃のことがあればこそなんだろうが、会ったびに言うのはどうかと思う。いまじゃ挨拶の一部となっている節すらある。

それに、助かっていたのは彼女なのはだけではなかった。だから本当に士郎さんの言葉は身に余る物だ。

「天気もいいし、外で遊ぼうか？」

「うん！」

「それじゃ行ってきます。公園の辺りで遊んでいると思いますので。」

「いつてきますなの！」

「はい、いつてらっしゃい。お昼までには一度戻ってくるのよー？」

「はいなの！」

士郎さんと桃子さんに見送られて外へとでる。

これも信用の賜物なのか、子供だけで外に出ることにはもはや何も言われることはなくなった。

公園に向かう道すがら、なのはとたわいない会話をする。

「なのはは、聖祥大付属の小学校に行くんだっけ？ちゃんと勉強してるか？」

私立聖祥大学付属小学校はいわゆる『お受験』が必要な小学校だ。入学後もそれ相応な学力を必要とされる為、今からの勉強が欠かせないのである。

「うん。お勉強は難しいけど、お兄ちゃんとお姉ちゃんに教えてもらってがんばってるの！」

「ははっ偉いなあ、なのはは。」

「そんなことないよ！……りょうちゃんは付属小学校受けないんだよね？」

「そうだね。俺は近くの小学校に行く予定だよ。近くにいないと母さんが何やらかすか分からないからね。」

「にやはは…。これじゃどっちが保護者かわかんないの…。」

俺としては母さんの負担は出来るだけ軽く出来るようにしたかった。なのはには言わないが、俺が付属小を受けないのは金銭面の問題が一番大きい。

聖祥大付属小学校は要求される学力もさることながら、その授業料もバカにならない金額だ。

炊事面も受け持つようになった最近の俺は、いかに我が家の家計が苦しいのかを痛いほどかみ締めていた。そんななかで付属小学校に行かせてくれなんて事は口が裂けても言えないことだ。

「りょうちゃんと一緒に学校に行けないのは寂しいなあ…。」

「まあ、家は近所だし寂しくなったらいつでも会えるさ。それに小学校で友達が出来たら俺のことなんてすぐ忘れちゃうかもしれないよ?。」

「そ、そんなことないよ!!だってりょうちゃんは……（ゴニョゴニョ）。」

「…? なに?。」

「な、なんでもないの!それよりもう公園に着くけど、今日はなにして遊ぶの?。」

「んー、そうだね…。なのはは、なにして遊びたいの?。」

疑問に疑問を返す。だが、これはいつものことなのでなのはも特に困ったという反応を見せることも無い。

「えっと、それじゃ”かくれんぼ”がいいの！」

これもいつものことだ。なぜかなのはは”かくれんぼ”が大のお気に入りだよ。だ。

しかもこのかくれんぼ、全然かくれんぼっぽくないのだ。

まず俺はすぐに見つかるようなところにしか隠れないし。なのはがどんなところに隠れても俺が速攻で見つけ出してしまおう為、隠れている時間が圧倒的に短いのだ。

でもなのはは、俺が見つけてやっても、俺のことを見つけても大喜びするし、俺としても少ない労力でなのはを満足させることが出来るので、かくれんぼはドンと来い！という感じだった。

そうして、夕方まで遊んでなのはを家まで送り届けるのがここ数年の俺の日課となっていた。

今日もなのはは俺との遊びの内容に満足してくれたようだ。

なのはを送り届けた後は、商店街へと買出しだ。

家からだ、スーパーの方が近いのだが、わざわざ遠出するにはわけがある。

『おう、涼ちゃん。いつも偉いねえ。これおまけして安くしておくから！』

『涼ちゃん、これも持って行くといいよ。おまけしておくから！』

といった具合に商店街のアイドル涼ちゃん状態の俺は、『おまけ』

をいっぱいもらえるのだ。

あざといけれど、これも生きていく為なのだ。

商店街から戻ってからはすぐに夕飯の支度に取り掛かる。

どうでもいいが、この世界にきてからどんどん生活能力が向上してきている…。うむ、こんな6歳児他にはいないだろう。断言できる。

「ただいまあゝ。はあ…つかれたー!!」

とか考えているうちに、母さんが帰ってきた。

えらくハイテンションだ…っていうかそれはいつものことか。俺はこの人の暗い顔を見たことがない。

つらいこと、疲れること数え切れないほどあるだろうに、俺の前ではそんな素振りを見せないのだ。本当に頭が上がらない。

「おかえり。もうすぐ飯できるから、少し待ってて。」

「はい。」

やがて夕飯の支度を終えて2人で食卓につく。

「いただきます。」

「いただきます。」

決して裕福ではないし、なにかと不便さは感じるけれどこの世界にやってきてからの生活は充実していた。

そりゃ、自称神に言われたような当初の目的とは遠くかけ離れているけれど、そんなことどうでもいいくらいに俺はこの第二の人生が

気に入ってるのかもしれない。

「ねえ、涼ちゃん。」

「ん？」

いつもどおりの夕食。

でも母さんの雰囲気は少し違うように感じた。

「涼ちゃんはホントは何かしたいことがあるんじゃないの？こんな普通の家じゃお母さんがやるようなこと全部引き受けてさ…。やりたいこと、なんて大層なものじゃなくても、もっと遊びたいとか…そういうのもいいんだよ？もっとわがまま言ってもいいんだよ？」

…正直やりたいことなんてないし、本当に今の生活以上を望むことも無い。強いて言うならば、母さんの負担を減らしたいということぐらいだ。

でも母さんには俺が何かを我慢しているように見えていたのかと思うと少し、いや…かなりショックだった。

「ははっ、何言ってるんだよ母さん。似合わないよ。そんなに真面目そうなこと言ってさ！ほら、早く食べないと冷めるよ。」

そんな動揺を悟らせないように笑ってごまかした。少し笑顔がぎこちなかったかもしれない。

「……うん。そうだよねー！せっかく涼ちゃんが作ってくれたんだから早く食べないとね！」

母は天然ではあるけれど、決して頭の悪い人ではない。

それ以上は察してくれたのだろう、追求はなかった。

…思えば前世もあわせて『やりたいこと』なんてものはなかった。

なんなんだろうが、俺のやりたいことって。

- - -俺の中に生まれた小さな疑問なんかには関係なく、今日も夜はいつも通り更けていった。

### 第三話（後書き）

ここまで全く魔法でてこない！！！！なんたること！

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 第四話（前）

「ねえ涼ちゃん。もし……もしだよ？涼ちゃんは新しいお父さんが出来たらどうする？」

小学校一年生の冬。

いつものように夕飯の準備をしている後ろで、うちの母さんがなにやら突拍子の無いことを言い出した。

とりあえず、料理の手を止めて母さんの方へと振り返る。

「どうしたんだよ、いきなり。」

どうしたもこうしたも、普通に考えてこれは再婚……いや、正確には俺の父親とは婚約していなかったんだっけ。  
とにかく、母さんに誰かいい人が出来たということだろうな。

「いやあ……えへへ……。」

うむ、いい歳して初々しい。しかも似合っているのが少しムカツク。  
というか、母さんははにかんではかりで話が進まない。

「なに、結婚するの？」

「え、ええ……そんなはつきり言わないでよ／＼／」

なんだろうこいつ。わが母親ながら不安になってくるぞ。

「んで…涼ちゃんは思うの…?」

いや、どう思うって言われてもな…。

「母さんが、その人をいいと思うんなら俺は何も言わないけど。」

「それじゃOKだね!？」

ぱあつと顔を明るくする母さん。でもさ…。

「…たださ、俺のことを気にして結婚するって言っんなら、俺は反対だよ。」

俺は結婚っていうフレーズが出た瞬間に、一年ほど前の母さんの言葉を思い出していた。

普段真面目な話なんてしない母さんがあんな話をしたせいで妙に印象に残っていたのだ。

「う……え、えつと…。」

「……………」

…母さんはすぐに顔に出る人だ。

そこで俺はこの話は終わりとばかりに再び台所へ向かい料理を再開

した。

その後はなんとなく気まずい雰囲気の流れていたせいで食事中も会話はほとんど無かった。

「それじゃ行ってくるよ。」

「いつてらっしゃい、涼ちゃん。」

小学校にあがってから、俺は夕飯の片付けを終えてから外出するようになった。

向かう先は高町家だ。

一年前の母さんの言葉で、自分のやりたいことってやつを知りたいと思った俺はとりあえず新しいことを始めようと思った。

そこで始めたのが剣術だった。

といっても、高町家の流派――御神流はむやみやたらに教えるものではないそうで、本当に基礎の基礎を教えてもらっているという感じだ。実際流派の名前すらも土郎さん達から聞いたことはない。

ただ、基礎の基礎といってもやはり教えてもらうことで見違えるものだった。

自称神様はどうやら本当に俺に武術の才能とやらを付与してくれていたようだ。正直自分の上達をここまで肌で感じられるのは気持ち良い。

ただ、剣術を始めて分かったのは、神様がくれたのは『素質』だけってことだ。

要するに、磨けば磨くほど光るが、手をつけなければ凡庸なまま終わるってことだ。

しかし、上限が無いかのような上達をおもしろいと思ってしまっている俺は相当に好き者なのかもしれない。

「よし、それじゃ一息いれるか、涼君。」

「はあ…はあ…、はいっ。」

まあ、とはいうものの小学一年生の筋力・体力共に大したことがないのですぐにへばるんだけど。

休憩に入ったと見るや、ずっと俺の鍛錬をみていたのはがタオルを持って近づいてくる。

なにがおもしろいんだか、俺が高町家の道場に通うようになってからというもの、いつも道場の端で行儀良く正座して眺めているのだ。

「ありがとう、なのは。」

「いえいえ、どういたしましてなの!」

休息をとりながらもなのはの話に耳を傾ける。

「でね、アリサちゃんかね！……。」

小学校に入ってからというもの、なのははより一層明るい子になった気がする。

仲良し3人娘を結成してからというものそれは更に顕著になっているように思えた。

というか、いつもなのは話を聞いているだけでは申し訳ない。

たまには俺からも話を振ってみることにする。

「なあ……なのは。」

「ん？どうしたの、りょうちゃん！」

普段あんまり俺から話を振らないこともあってか、なのはの食いつきがすごい。というか目が輝いている。

「結婚ってどう思う？」

「……………」

なんかなのはが固まった。

「ふええええ！？」

と思ったらいきなり奇声をあげた。

『おい、涼君。そろそろ再開するぞー。』

「はい、わかりました！ごめんなのは、鍛錬再開みたいだ。」

「う、うん…。」

なんかなのはの様子がおかしかったけれど、放置して鍛錬を再開する。

結婚について母さんには反対とは言っただけで、正直なところ迷う余地はある。

恐らく結婚によって収入面では劇的な変化があるだろう。それはつまり母さんの負担も軽くなるということだ。

なんだかんだ言っただけ俺は賛成したい気持ちがあったのかもしれない。

もやもやとした気持ちを抱えたまま、その日の鍛錬は終わった。

家に帰ってから、なんとなく気まずい空気が続いていた。

俺は帰って早々に風呂へ入り、そして布団へともぐりこんだ。

そのまま寝てしまおうと思っていたが、なぜだか目が冴えて眠れなかった。

狭い部屋の中、背後で母さんが並んで敷かれたもう一組の布団に入り込む気配がする。

『…………。』

しばらく経っても母さんの方から寝息が聞こえてくることは無かった。

「…………。」

「ねえ、涼ちゃん？おきてる、よね？」

「…………なに？」

「えっとね、私も最初は涼ちゃんにもっと楽をさせてあげたいとかそついう気持ちで結婚しようと思ったの。」

「…………。」

「でもね、相手の人と話しているうちにさ…、なんていうかこの人

良いひとだなあーって。」

「母さん。」

「え？」

「俺は言ったよ。母さんがいいと思う人なら俺は何も言わないって。」

「えっと、それはつまり……いいんだよね？」

「さあね。……おやすみ。」

なんとなくはつきり言うのは憚れて、ごまかした。

「もうー、素直じゃないなあ涼ちゃんはー。」

「っておい！なにしてんだよ！！」

いつの間にか母さんは俺の布団の中に侵入してきていた。  
あまつさえ俺を抱き枕のように抱え込んでくる。

「実はね。今度のお休みの日に涼ちゃんにも会ってもらおうと思っ  
てたんだ。ついてきてくれるよね？」

「まあ…そりや会わないわけにもいかないからね。」

「えへへ〜楽しみだなあ〜。」

母さんの態度から考えるに、なんだかんだで相手の人は結構良い人

なのかもしれない。

「あっちも娘さん連れてくるって言ってたからね。ふふっ、涼ちゃんももうすぐお兄ちゃんだよ。」

「はっ…?」

初耳過ぎて驚きだ。

ていつかまさかの相手も連れ子もちか…。

そして母さんの婚約予定者との初顔顔合わせの日がやってきた。

あんまり気張るのもどうかということで、場所は喫茶店だ。

どうやらこちらの方が早く到着したようで、適当に注文をして相手方を待つ。

ちなみに俺はオレンジジュースだ。前世ではコーヒー好きだったんだが、いまだに子供舌なせいでコーヒーはただ苦いだけの飲み物になりさがっている。

ストローでちびちびとオレンジジュースを飲んでいるとどうやら相手方が到着したようだ。

母さんの婚約予定者の第一印象は、それなりに若くて、まあ普通に”良い人”という感じだった。

身に着けているものや、立ち振る舞いはそれなりの身分を想像させるものだった。

そして、その後ろに隠れるようにしてついてきているのが恐らく娘さんだろう。

「はじめまして。一ノ瀬涼と申します。」

あまりべらべらと喋るのもよくないだろう。最低限の自己紹介をしてぺこりと頭を下げた。

と、頭を上げると隠れていた娘さんと目があつた。

「こんにちは。」

コクナイヨーというアピールのつもりで笑いかけながら挨拶を試みた。

「…………ッ!」

スゴクニラマレマシタ。

どうやら相手の娘さんからの俺への第一印象は最悪のようだった。

うむ。これは傷つく。

そのあとは自己紹介も終えて、たわいない会話をした。

話を聞いている感じでは、どうやらどこかの新興会社の社長をしているようだった。

母さんはこの人を一体どこで捕まえてきたのだろうか。甚だ疑問である。

そして娘さんのほうは、実奈ちゃんというらしい。

自己紹介では俺と同じ年だと言っていたが、どうやら生まれ月が遅いようだ。

そして通っている学校は私立聖祥大学付属小学校らしい。

さつきは隠れていたせいで容姿は余り分からなかったけれど、正面に座っているいまは良く見えた。

実奈ちゃんは黒く長い絹のような髪をしていて、目鼻立ちは整っていてまるで人形のような子だった。

特に目が印象的だった。大きくパツチリと開いた目はすごく穏やかな印象をこちらに与え、その黒い瞳を見ていると引き込まれそんな感覚を覚えた。

ただ、なぜか俺を見るときはその穏やかな目がキツと細められ睨みつけてくるのだ。

どうやら完全に嫌われてしまったようだ。

ひとしきり喋り終えたあとは、喫茶店をでてどこか買い物にでも行

こうという話になった。

正直欲しいものなど何も無いのだが、喫茶店のなかで正面からずつと睨まれているよりはまし、とすぐにその案に賛成した俺はへたれなのだろうか？

喫茶店をでてからも俺と実奈ちゃんはギクシャクしていた。大人2人もそれを察しているのだろう、2人して俺と実奈ちゃんを仲良くさせようと必死だ。

正直俺としても実奈ちゃんと仲良くしたいのは山々だし、俺のせいで母さんの良い話しを台無しにするのは非常に困るところだった。

「これなんか実奈ちゃんにはよく似合うんじゃないかな？」

女の子が喜びそうなアクセサリーなどを扱っている店に4人で入った、どうやら実奈ちゃんのご機嫌をとる作戦に大人は乗り換えたようだ。それにおれも乗っかり実奈ちゃんに似合いそうな可愛いネックレスを勧めてみている。

「……………」

だが、一瞥しただけですぐに興味を失ってしまった。

本当に取り付く島もない。

母さんに対してはすごく良い子までいかなくとも、少なくとも普通の態度で接しているのになぜか俺だけが敵視されている。うむ、なにか気に障ることをしてしまったのかなあ？

大した戦果も挙げられないまま、実奈ちゃんがトイレに行きたいといい1人離れていった。

1人で行かせていいものかな？とは思ったが、あまり過保護にする  
と怒るんですよ、と父親がいうのだからそうなのだろう。

……でも、実奈ちゃんはいつまで経っても帰ってこなかった。

#### 第四話（前）（後書き）

ご意見・ご感想おまちしております。

#### 第四話（後）

「私少し様子を見てきますね。」

そういつて母さんは少し早足で実奈ちゃんの様子を見に行く。

確かにトイレにしては遅すぎる。

なんとなく嫌な予感がする。

そして案の定、暫くして母さんが今度は明らかに焦っている様子でこちらへ駆け戻ってきた。

「た、大変っ！実奈ちゃんがどこにも見当たらないのー！」

「なんだって…！？」

一人娘の突然の失踪に驚愕する実奈パパ。

「携帯に連絡は？」

「いや…あの子は機械が苦手で携帯も持ち歩いていないんだ…。」

……今時携帯も使えないほどの機械オンチってのも珍しいな。

しかし、呆れている場合じゃない。

一応あの娘の父親は一企業の社長をしている。もしかしたら、もしかする可能性がある。

「それじゃ、母さんはもう一度トイレ付近を探してみて。俺達は手分けして実奈ちゃんを探すから！」

「わかったわ。」

母さんは俺の言葉を聞くや否や再びトイレの方へ駆けて行った。

「すみません。携帯2つ持ってますよね？一つ連絡用に貸して欲しいんですけど。」

今度は実奈パパに向かい言う。

正直出会って間もない小学1年生にこんな事を言われるのは大人としては嫌だろうが。

「あ、ああ。でもどうして2つ携帯持っているって分かったんだい？」

仕事用とプライベート用に携帯を分ける人は多い。もちろん一方で携帯を分けない人も大勢いる。

だが、この人の立場と人となりを見た感じでは、携帯を分けているという確信が持てた。…もちろん直感なわけだが。

まあ、今はそんなことを説明している場合じゃない。一分一秒が惜しい。

「今はそれよりも探す方が先です。この携帯お互いに番号入ってますか？」

「ああ、大丈夫だよ。ふふっ、涼君は本当に話しに聞いていた通りの子みたいだ。」

母さんがどんな風に俺のことを話していたのかもものすごく気になるところだったが、グッと我慢。

「ただの迷子の可能性もあります。警察に連絡するのは後にしましょう。では、僕はこちらの方を探しますので。」

「了解だ。」

俺は実奈ちゃんを探す為に駆け出した。

……………剣術を始めていて本当に良かった。

打ち込みや、仕合をすればすぐに息が上がるほどの体力しかまだ無いかいけど……少なくともただ走るだけならば相当に長続きするようになった。

剣術で鍛えた体力にものを言わせてがむしゃらに駆けずり回る。

でも実奈ちゃんは見つからない。

途中母さんから電話が掛かってきた。

実奈パパから渡されたのはプライベート用の携帯だったようだ。まあ当然だけど。

「実奈ちゃんみつかったっ!？」

通話ボタンを押してすぐに聞く。

『え、あれ？涼ちゃん?』

予想外の人間が電話に出たことで戸惑う母さん。

「連絡用に携帯貸してもらったんだよ。それで見つかったの?」

逸る気持ちを抑えて冷静に聞きなます。少し熱くなり過ぎているようだ。

しかし、母さんの答えはやはり見つからないというものだった。予想通りだったとはいえ、焦りはつのる。

俺は、母さんに俺と実奈パパが探してない方向を教えて電話を切った。

その後も、互いに連絡を取り合いながら搜索を続けるが、見つからない。

本当にまずい。そろそろ警察に連絡をした方がいいかもしれない。

長い時間を駆けずり回ったせいで、足はガクガクになってきているし、心臓は早く休ませてくれと主張してうるさい。

――でも、止まるわけにはいかない。

身体に鞭打って走り続ける。

そして、やっと見つけた……

S i d e - M I N A -

お父さんから再婚したいんだ、と言われたのは最近のこと。

お父さんが仕事をしながら私を育てるのに苦労しているのはずっと前から分かっていた。

だから、再婚の話にもすぐに賛成しなくなった。……相手に私と同級生の息子さんがいると知るまでは。

見ず知らずの男の子と一緒に暮らすなんてありえない!!

答えを渋る私にお父さんはとりあえず会ってみようと言い出した。

本当はそれも嫌だったけど、お父さんがどうしても言うから仕方なくついていくことにした。

待ち合わせ場所の喫茶店に入るとき、本当に嫌だった私はずっとお父さんの影に隠れていた。

でも、自己紹介の声が聞こえてきて、なんとなく気になって少し顔を出してみた。

そしたら、息子さんと目が合ってしまった。

息子さんの第一印象は、大人びた雰囲気をしている人、だった。本当に同じ年なのか疑いたくなるくらいだった。

身長は私よりも少し大きいくらいだったとおもう。髪は少し色素が薄いのか茶色がかっているように見えた。

そこまで観察したところで、息子さんは私に向かって『こんにちは』といって笑いかけてきた。

なぜかすごい腹が立って反射的に睨みつけてしまった。

その後も何かと話しかけてくる息子さんだったが、ずっと私はムスツとして無視していた。

そして私は再婚に対する抗議のつもりで、トイレに行くと嘘をついてみんなから離れて走り出した。

とにかく遠くに行こうと思って夢中で走った。  
私の人生の中でこんなに走ったのは初めてだったかもしれない。

でも、気が付いたらそこは全然知らない場所だった。

気が付いてしまったら、急に心細くなって引き返そうと思ったけれど、今来た道も分からなくなっていた。

悪いことは重なるというのを実感したのはそのときだ。

私は転んで足を挫いてしまった。泣きつ面に蜂って言うのはこういうことを言うんだらうなって冷静に思ったけど、それ以上にどうしようもなく心細くなって、私はとうとううずくまって泣き出してしまった。

周りを歩いている人に見られるのが嫌で、それでも涙は止まらなくて、いつの間にかみんなあの一ノ瀬涼って子が悪いんだって八つ当たりしてた。

……本当は自分が悪いって分かったのに。

そのときうずくまっている私の肩が叩かれた。

私が振り向くとその人……一ノ瀬涼はこう言った。

「みーつけたっ！」

汗だくの顔に笑顔を貼り付けて本当に嬉しそうに。

わたしはその場違いすぎる言葉と表情にあっけに取られてしまった。

「あれ？足挫いちゃってるね。おんぶしていくよ、ほら乗って。」

で、気が付いたらおんぶされていた。

一ノ瀬涼は携帯を取り出してどこかに電話している。多分相手はお父さんだろう。

「はい、見つかりました。……すれ違うのも嫌ですし……そうです、ねここからだとも最初の喫茶店のほうが近いんでそこで落ち合います。……はい、母さんにはそちらから連絡しておいてもらえますか？……はい、助かります。ではまた後ほど。」

「なんで…？」

「ん？」

電話を終えた一ノ瀬涼に、気が付いたら話しかけていた。

「んつと、俺小さいときから幼馴染と一緒にかくれんぼばかりしてたんだ。だから見つけ出すのは得意なんだ。」

何を言っているんだろうこの人は。

「そうじゃなくて。…なんで怒らないの。」

「なんでって、どうして俺が怒るの？むしろ妹になる子をずっと泣かしていたんだからこっちが謝りたいくらいだよ。……こんなんじや兄にはなれないね。」

そう言っこの人は、たはは…と乾いた笑いをこぼす。  
この人はどこかずれているみたいだ。

「…………偽善者。」

「ははっ実奈ちゃんは厳しいね。」

こんなことを言われても苦笑だけで全然怒ろうともしない。  
ほんと何か調子が狂う。

だから。

「……………実奈でいい。」

「え…………？」

私もすこしずれたことをしてみる。

「だから呼び捨てでいいって言ってるの、お兄ちゃん。」

S i d e O U T

結局母さんは結婚することになった。

結婚したことでおれたち母子は引っ越すことになった。

今まで世話になった商店街の人達に挨拶回りをしたり、おんぼろアパートを見て感慨に耽ったりと何かと忙しかったが、それも昨日で終わりようやく落ち着いてきた。

ちなみに引越しに伴って俺は私立聖祥大学付属小学校への編入試験を受けて合格した。さすがに落ちるわけにはいかないので内心かなり冷や汗をかいていた。

ちなみに付属小学校へ編入することはなのはには内緒だ。編入予定のクラスはなのとは一緒だというから急に転校してきた俺に目を丸くする姿が凄く楽しみた。

「お兄ちゃん何してるの。置いてくよ。」

「ああ、今行くよ実奈。」

今日は付属小学校への初登校の日だ。

実奈とはいまいち距離を測りかねているが、まあ…それは時間が解決してくれると信じている。

『今日はみんなに新しい友達を紹介します。入ってきていいですよ。』

お呼びがかかった。

さて、なのははどんな反応をするかな？

案の定教室に入った俺を見て目を丸くしている。  
本当に予想を裏切らない奴だ。

「はじめまして。天宮涼といいます。皆さんこれからよろしく願  
いします！」

なんにせよ、これから新生活が始まる。

原作が始まるまであと一年と少し。  
今まで忙しくて手の出せなかったことに手を出してみるのもいいか  
もしれない。

と思いつつ、とりあえず俺は今日という日を楽しむことにした。

#### 第四話（後）（後書き）

まだ原作ははじまらない（汗

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 第五話

転校生のお決まりというか、転校初日の今日は休み時間になった途端囲まれて質問されるといことが何度もあった。

まるでアイドルにでもなったようで気分自体は悪くは無い。

ただ、視界の端っこでなのはが話したそうにしているのだけは気になっっていたが。

授業の方はというとさすがに依然通っていた学校とはだんちだった。とはいえ一応前世では高校生やっていたおかげで余裕ではあるし、この世界にきてから知識はすぐに吸収できるようになっていた。つまり頭がよくなっていた。……神様ありがとう。

んで、つつがなく授業も進行し、昼休みの時間を告げるチャイムがなった。

しかし俺はここで大きな問題に直面した。

なんと、ここ私立聖祥大学付属小学校では給食がないのだった！！

な、なんだってー！！！！

と、いいつつ事前に知っていたので、実はなんの問題も無いのだけ  
れど。

ただ、弁当と聞いて今朝は早起してかなり気合をいれて弁当を作  
った。

俺はこの弁当を駆使して餌付け……もとい、これからの学園生活を  
円滑に進めるための人脈作りをしようと思っていた。

とはいえ、八方美人とかは勘弁なので、仲良し3人娘辺りとまずは  
仲良くなればいいとも思っていた。

そうと決まれば、クラスメイトに囲まれる前になのは達を誘わなけ  
ればならない。

チャイムが鳴ると同時に、極めてすばやく俺はなのはに声をかけた。

「なのは。良かったら一緒に昼ごはん食べたいんだけど……一緒にし  
ていいかな？」

最後のほうは、なのはの脇を固めていた2人……すずか嬢・アリ  
サ嬢に向かって言った。

俺の言葉にアリサはこちらを値踏みするかのような目で見ていたが…

「もちろんだよ、りょうちゃん！いいよね、アリサちゃん、すずか

ちゃん？」

なのはにこう言われては何も言うことは出来なかったらしい、すぐに了承してくれた。

「でも、あなたと一緒にじゃゆっくりご飯が食べられそうに無いわね。」

了承に続くアリサの言葉はこうだった。

アリサの視線は、隙あらば俺に話しかけようとしているクラスメイトに向いている。

「寒いかもしれないけれど、屋上で食べましょ。いいわよね？」

了承の頷きを返すのはとすずか。もちろん俺も断る理由は無い。ただ今は2月だ、外は晴れとはいえ風はかなり冷たいし、はつきり言ってかなり寒い。

一応謝罪はしておく。

「悪いな、俺のせいで。」

「あなたが悪いわけじゃないんだし、気にすること無いわ。」

言いつつアリスは既に歩き出している。

アリスの態度はかなりそっけない。まあ初対面から馴れ馴れしいのもおかしい話だし、俺はこういうサバサバした感じは嫌いじゃない…、というか好きだ。

そういうことで、静かな屋上めざし仲良し三人組と連れ立って教室を出たのだが、ちょうど教室から出たところで意外な人物と出会った。

「あれ…、実奈？どうしたんだ人のクラスの前で。」

実奈はよほど俺に会ったのが意外だったのか、元々大きい目を更に開いて『私驚いています。』といった感じで立っていた。

その手には何かを大事そうに抱えている……あれは弁当箱？

「何してるんですか。」

驚きから復帰した実奈は今度はなぜか不機嫌そうに聞いてくる。

一緒に暮らし始めてから気が付いたが、実奈はたまに敬語になる。

まあ、どういふときっていうのは……察して欲しい。

「今から屋上でお昼にしようと思っていたんだけど。」

「ふん…。」

実奈の視線は俺からなのは、さすが、アリサと移ってまた俺に戻ってきた。

いつの間にか大きな目は細められてジト目になっている。

「ずいぶん楽しそうですね。」

「……えっと、一緒にお昼食べる？」

「結構です。みんなと一緒に楽しく食べればいいじゃない……。」

そういつて実奈は自分の教室の方へと行ってしまった。

……やっぱりどうも接し方が分からないな。

と、そこで俺の袖をクイクイと引っ張る手があった。

「どうしたんだ、なのは？」

「えっと、今の子誰かなーって。」

なんだか少しもじもじしながら言うのは。珍しいこともあるものだ。

そういえばなのはには編入のことどころか、結婚の話すらしてないんだっとな。

「えっと、俺が転校してきたことにも関係あるんだけど、なのはに前は少し結婚がどうか言う話したよな？」

「！！！！………ってことは、もしかしてあの子は…。」

うむ、理解が早くて助かる。

「そういうこと。」

お察しの通り俺の義妹です。

「そ、そうなんだ……。そうなんだ…（ぶつぶつ…）」

「？ それより早く屋上行かないと休み時間が終わるぞ？」

なんだかなのはがぶつぶつ言い始めたが、今はそれよりもお腹の減り具合の方が深刻だ。

「はあ…、アンタって…。まあいいわ、このままにしておいた方が私的にはおもしろいし。」

「ア、アリサちゃん…なのはちゃんが可愛いそうだよ…。」

なんだか話が噛みあっていない気がしたが、とりあえずは当初の目的地である屋上を目指す。

「……………さみい。」

「当たり前でしょ。今は2月なんだから。それよりもコートも着てこないあんたが悪いのよ。」

屋上に出た俺はあまりの風の冷たさに凍えた。

まったくもってアリサさんの言う通りだ。ちょっと外に出るくらいだからいいやって思っていた俺がバカだった。

「ベンチに座って食べましょ。そうね…、あそこがいいわね。」

といってアリサが指し示すのは、ちょうど障害物があって風が適度に避けれる上日当たり良好という優良物件だった。

そこへ俺はベンチを引っ張っていき、丁度向かい合うように設置した。

うむ、風も当たらなくて日差しが心地よい。

それぞれベンチに着席してようやく弁当を開く俺達。

「うわっ……デカッ……。」

「天宮くんの、おっきい……。」

「そ……そんなの、はいるの……？」

……。

.....。

なんだろう、変な想像を膨らませてしまった俺は死んだ方がいいの  
だろうか。

どうやらみんな俺の（無駄に）気合の入った弁当を見て驚いてしま  
ったようだ。

ネタで爆弾オニギリとか、巨大ミートボールとかやってしまったかな。…反省。

ちなみに、今日の実奈の弁当も俺が作った。あつちが普通の内容だから大丈夫。

それにしても、実奈は今まではどこかで昼食を買って食べていたらしくて、弁当を作ってたらずい少しく戸惑っていたみたいだな。

『あ、ありがとう…』とか言ったりして…、あいつが俺にお礼を言うのなんて初めてだったから少し面食らってしまった。

「それにしてもこんな時期に編入なんて、やっぱり結婚とかなんとか言ってたのが理由？」

「そうだね。もともと前の学校は近いからって言う理由とかその他諸々があつて選んだんだけど、結婚に伴って引越したからね。それなら妹と幼馴染がいる学校でいいや、ってね。あ、これ食べる？」

アリスに特製ミートボールを差し出す（普通サイズ）。

「んっ、もぐもぐ…おいしいじゃない。妹って相手さんの連れ子よね？」

「そうそう。でも良く分かったね。もしかしてなのはが俺のことなんか言ってた？」

「まあ…色々だね。」

「そっか、まあ俺もなのはから2人のことは良く聞いてたよ。2人とも勉強も運動もできて、しかも可愛いんだよね。」

「なのはったら人を持ち上げすぎね。」

「ははっ、そんなことないって。ホントになのはが言っていた通りだと思うよ。」

「ふ、ふんっ。おだてたって何もでないわよっ。」

思いのほか話が盛り上がってよかった。

もつともアリサとかは人と話す機会が多だろうから人から話しを引き出したりするのが自然とうまくなっているという面もあるんだろうが。

すずかは、積極的に話はしないが聞き上手といった感じた。これにもなにか人徳のなせる業だろうか？

ただ、1人気がかりな奴がいる。

「なあ、なのはがさっきからずっとぶつぶつ言ってるんだけど、何かあったのか？」

「簡単に言えば、勘違いから来る自爆ね。なのはは妙に頭が堅いところがあるから……なんというか思い込んだら一直線的な。」

「あー、それは分かる。昔は良く苦労したもんだ。」

「私としては放置しておくのもおもしろいかなと思ってたけど、これは少しひどいわね。はあ……しょうがない……。」

よいしょ、とばかり腰を上げたアリサは、何事かをぶつぶつ呟いているのはの耳元へなにか囁いているようだ。

「!!!! アリサちゃん、それホント!？」

「ホントよ。というか、なのは勘違いの方がありえないでしょ？それにさっきの会話でも普通に言っていたし、ちゃんと人の話は聞くこと!」

「は、はあゝい…。」

ちよつとシユンとした感じに返事をするなのは。なんにせよ復活したのはいいいことだ。

「何を勘違いしてたか知らないけど…、そういえば今日帰りになのは家寄っていいか？一回家に帰ると二度手間だし。」

「あ、うん。それじゃ一緒に帰ろつか？」

「ん、あんたなのは家に何か用事でもあるの？」

「ああ、俺はなのは家で少し剣術を教えてもらっているんだ。といつても基礎の基礎だけだな。」

「ああ…、そういえばそんな話も聞いたこともあったっけ。でも基礎の基礎って、あんたって天才だとか言われているんじゃないの？」

「……………？ いや、そんなのは初耳なんだけど。」

「ア、アリサちゃん！それはりょうちゃんには内緒なんだよー！」

えらく焦った様子でアリサにいまさら口止めするなのは。しっかり聞いてしまいました、もう手遅れです。

「なにか知っついていそうですね、なのはさん？」

とりあえず凄んでみた。昔からなのははこうすると大抵のことは吐く。

「えっと……、お父さん達がこの前話しているのを聞いて、でも口止めされてたから……そのう……。」

「へえ……、それは素直に……その……嬉しいな。」

「え……？」

柄にもなく、すごく照れてしまった。

「そのさ……土郎さん達は普段俺に対する評価は言ってくれないからさ。こうやって人伝いに聞いても嬉しいよ。でもどうせならいつか本人達の口から言わせてやりたいな。」

「へえ……。」「

なんかアリサがこっちをニヤニヤしながら見ている。照れるだろ、こっちみんな／＼

「ねえ、私達も練習しているところ見てもいい？」

「え……。」

正直勘弁してほしい。未だに士郎さんたちにはボロツカスにやられるのだ、そういうのはあまり見られて気持ちいいものではない。

「もちろんだよ！にやはは、放課後が楽しみになってきたの！」

なんで、こんなにノリノリなんだろうかこの子は。

…これは腹をくくるしかないな。

で、放課後。アリサ達は本当についてくるつもりらしい。

「さあ、早く行くわよ！」

「いっつ、りょうちゃん」

手まで引いちゃって。これは逃げられない。

と、教室から出たところでまた思わぬ人に出会った。

「たのしそうですね。」

その人物……実奈はいきなり不機嫌全開だった。

しかし、なのははその不機嫌娘に突撃していく。

「あーりょうちゃんの妹さんだよね？今から私の家に皆でいくんだけど、妹さんも一緒にいい？」

「え…？わ、わたしは…え？ちよ、ちよっと待ってっ…！！」

いつの間にかなのはは俺の手を掴んでいるのとは反対の手で実奈の手も掴んでいる。

ここまで来れば1人増えようが大した差じゃない。もうどうにでもなれ。

で、気が付けば高町家。

朝はバスを利用するのはの家まで歩いてきたので、結構な時間がかかった。

ただ、その間に3人娘と実奈はかなり仲良くなっていた。

実奈はもつと気難しい子だと思っていたのに、普通に社交的な子で少し驚いた。  
「とうか俺だけに厳しい態度をとっているような気がしてきたんだが…。」

「おっと、今日はなんだか賑やかだな。みんないらっしやい。…つと新顔の子がいるな？」

家の中で時間をつぶしていると、土郎さんが翠屋から帰ってきたように顔を見せてくれた。

「この娘はこの前はなした僕の妹になった実奈です。」

「ああ、噂の実奈ちゃんか。はじめまして、なのはの父親の土郎です。」

「はじめまして、天宮実奈です。うちの兄がご迷惑をかけているみたいで…。」

うちの妹はこういう自己紹介をさせると特別な事を言っていないのに、もともとの容姿と相まってどこかのご令嬢ですか？という雰囲気を出すから驚きだ。まあ実際育ちは良いんだけども。とうか後の言葉は余計だ。

「いやいや、涼君には娘も良くしてもらっていて感謝しているくらいだよ。ところで今日は勢ぞろいでなにかやるのかい？」

「みんな、僕が剣術をしているという話を聞いたら、練習を見てみ

たいと言ってきたんで……この状況です。」

苦虫を噛み潰したような顔で士郎さんに状況説明をする。

すると士郎さんは面白くて堪らないといった感じで、

「ははっ、それじゃ恭也が帰ってきたら始めるとしようか。今日はみっちりしごいてやるから覚悟しておくんだよ涼君。」

間違いない、この人はドSだ。

嵐のように士郎さんが去っていくと、アリサが不思議そうに言う。

「あんたって年上の前では口調変わるわね。」

「まあ、そりゃ目上の人に向かって俺とか言ってるのはどうかと思うしね。」

「それは同意するけど……。」

「けど……?」

「お兄ちゃん、きもい。」

……………。

なんか扱いがひどすぎると思う。

やがて恭也さんが帰ってきたので、道場へと移動する。

「お前らこっちは真面目にやってるんだからぜつつつつつつた  
い笑うなよ。」

「はいはい。」

「天宮くんがんばってね。」

「りょうちゃん、しっかりなの!」

「身内の恥だけは晒さないでください。」

約二名かなり不安な奴らがいるが、まあいい。

士郎さんはしごくとは言っていたけれど鍛錬はいつものおりの内容

だ。

いい加減すぐへばることもなくなってきた俺は、自分の理想形を求めて鍛錬を行う。

「よし、それじゃ休憩前に一本仕合をするぞ。」

前言撤回。いつもは休憩前に仕合なんてしない。

もしかして休憩に入る前には毎回仕合をはさむつもりだろうか士郎さんは。死ぬぞ

と、文句を言っているけど仕方ないので今は仕合に集中する。

仕合は実戦だったら致命傷。という攻撃を受けたら終わりというものだ。

というか、仕合でも木刀を使っているので致命傷になりうる攻撃は普通にでるし、もし受け損なえば骨も砕ける。

改めて思うと肝が冷えるな。

『はじめっ！！！』

士郎さんの声とともに俺は恭也さんに突っ込む。

恭也さんは俺を迎えるように、右手で突きを放つ。

それをギリギリで左にかわし、打ち込みを放つ…がかわした後の体勢からでは踏み込みが甘かった。

少し身体をずらすだけでかわされた上、反撃が振り下ろしの攻撃で来る。

それをギリギリで且つ恭也さんの裏に抜けるようにかわす。ちょうど体当たりをしにいくような感覚でもある。

そこから流れて柄部分でわき腹をえぐる様に殴りつけに行く。

が恭也さんの攻撃の方が早い、殴りにいった手で恭也さんの攻撃を流す。

すると今度は膝が飛んでくる。

それを掻い潜りながら、足を刈りにいく…が既にそこには目標の足はなかった。

恭也さんは宙返りしながらも容赦なく攻撃を加えてくる。

それを避け、流して凌ぎ反撃を狙う。

着地の瞬間に開きかけた距離を再び詰めて行く。

そうはさせまいと恭也さんの攻撃が襲ってくるがそれをギリギリ見極め避ける。

俺がもし勝つとしたら、超接近戦でしかありえない。

そしてそれに加えて恭也さんの攻撃をまともに受けてはいけないという制約もある。

まず、超接近戦に持ち込むのは、俺が恭也さんより優れているのがこの小さな身体だけだからだ。この身体で密着されるとかなり相手はやりづらい。

そして攻撃を受けてはいけないというのは、筋力のスタミナの問題だ。

恭也さんに比べれば普通の体力も相当に劣る俺だが、それ以上に深刻なのは筋力だ。

もし恭也さんの打ち込みをまともに受けたならば、かなりの筋疲労が襲ってくる。そうなればすぐに俺の腕は上がりなくなり敗北決定だ。

故にかわして、流す。

そして、その動作にも無駄を発生させてはいけない。

常に攻防一体となるように、相手の裏・死角・攻撃の出来ないところへ移動する。

とはいえ、かなり怖いのも事実。……一方で超楽しいのも事実なんだが。

「ハッ！」

「ふッ……!!」

……俺と恭也さんの仕合は加速していく。

「……なにあれ、どこのバトル漫画よ……。」

「……す、すごい。」

「……………。(じー……)」

「りょうちゃんいつもより気合はいつてるみたいなの!」

「っていつか、もう何しているかわかんないわね……。凄すぎて。」

「実奈ちゃんなんか黙って見入っているね……。」

「……あつ、あぶないお兄ちゃ……『やめっ！！！』……はあ……  
……ッ！な、なんですか？」

「いや、別に何も無いわよね、すずか？（にやにや）」

「そ、そうだね。アリサちゃん。（苦笑）」

「………やっぱり油断ならないかも………なの！（キリッ！）」

ふう…… やっぱりまだまだ勝てそうにはないな。

「ありがとうございます、恭也さん。」

「ご苦労様、涼。良い練習になったな。」

「さあ2人とも休憩だ。あっちにお茶があるぞ。」

士郎さんに促されるままになのはたちのいる場所（お茶のある場所）  
へと歩いていく。

というか、なにやら賑やかだ。

「お前らあれだけ言ったのに、俺のこと笑ってたんじゃないだろうな？　つていうか実奈なんか顔が赤いけどどうした？」

「なんでもっないですっ！！」

うむ、どうやらまた怒らせてしまったようだ。

負けたのがあまりにも情けなかったからかな……。

はあ…、まあとりあえずお茶でも飲もう。

「そついえば涼君、付属小学校はどうだった？　良い学校だろう。」

「ええ、勉強のレベルは前の学校とじゃ比べようも無いですけどね。」

いいつつお茶を注ぐ。

「あ、そうだそうだお父さん、お兄ちゃん。」

グイッと冷たいお茶を一気に口に含む。これが堪らない。

「りょうちゃんのが、すっごくおっきかったんだよ!!」

そして一気に吹き出す！

「ブーーーーーッ」

「ああ大きかったわね。」

「うんうん、大きかった。」

おまえら!!頼むから主語を入れろ、主語を!!

恐る恐る土郎さんと恭也さんのほつを振り向く。

『へえ、そうなんだ。それじゃ鍛錬再開するか(しょうか)』

そこには不自然な笑みを顔に貼り付けた鬼が2人いた。  
ていうか、まだ休憩はじまったばかりで……はい、拒否権ありませんよ。

「っていうか弁当がですね!？」

『なんだい?(ギロツ)』

死んだな……。

その日、高町家の道場からは悲鳴が絶えなかったという。

## 第五話（後書き）

涼「弁当が！！弁当が大きかったんだよ！！」

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 第六話（前）（前書き）

ようやく原作っぽいです。

## 第六話（前）

r i r i r i r i r i r i …

「ん…。うるせ…。」

もそりと布団から這い出て、目覚まし時計を止めに立つ。

目覚まし時計を枕元に置くとそのまま二度寝コースになるので、俺は遠くに目覚ましを配置している。

「ふあああ～～～～…。ねみい…。」

時刻は5時半。

季節は秋。夏の間はもう明るかったこの時間も近頃はまだ薄暗い。

実奈にはこの時間に起きていると話したら『どこのおじいちゃん？』  
と言われてしまった。

一応肉体的にはまだ7歳なんですけど…。

着替えを済ませた後に、自動的にシャッターを降ろそうとする瞼を強制的に開かせるために、顔を洗う。

秋になって水も冷たくなって良い感じに目が覚める。

次に台所で、寝ている間に失った水分を補給する為に冷たい水を飲み干し、それから外へと出かける。

目的地はちょっとした丘の上にある公園。

トレーニングと時間短縮も兼ねて、公園へはランニングだ。

「すーっ……はぁぁぁ……、シャバの空気はうまいぜ……。」

公園に着いたら思わずやりたくなってしまう深呼吸。

いや、別にお勤めしてきたわけでもないんですけどね。

ついでに言えばこれをやるだけに朝も早くからこんな公園へやってきているわけではない。

「だぁー！ー！！うまくいかねえ！！！」

朝も早くから人気の無い公園で魔法の練習をしているのです。はい。

しかしこれがうまくいかない。

2年生の初夏ぐらいから早起きして練習するようにはなったが、一向にうまくいかない。

そもそも魔法なんて使ったことも見たことも無いのだ、やり方なんて分かるわけではない。

それでも、なんとかならないもんかと色々試行錯誤はしてみた。

うる覚えの原作を思い出してみて『確か魔法を使うときは魔法陣が出ていたな…』と思えばオカルト系の本とかを読んでそれっぽい魔法陣を作成してみたりもした。

オカルト系の本を読んでいるのを実奈に見られて『キモイ』と言われたのも良い思い出だ。なんだろう目頭が熱くなってきた。

「んー、やっぱり魔法陣が大切な？でも、どうしても原作の魔法陣は思い出せないんだよなあ。」

俺が作った魔法陣は、中心に六芒星を置いて、その外枠に二重円を描き、更に円と円の間にはそれっぽく見えるようにラテン語ってやつを敷き詰めてみた。意味なんて考えてないからその筋の人がみたら笑われるな。

「っていうか、ラテン語なんてそれっぽいからって勢いで使ったけど、ぶっちゃけ覚えてないからイメージもクソもないんだよな…。」

ってことでイメージしやすいと言ったらやっぱり日本語しかないわけ。

「……………でたよ、魔方陣…。」

意外とあっさり成功するから困る。

だが、これはない。書いてある文字が十二支だなんて認めない！！  
いや、円の周りに文字って言ったら、真っ先に高校で覚えさせられた十二支の図が浮かんだんだよなあ…。

「まあやっぱりイメージしやすいのが要点ってことだよな、十二支だったからなんてのは却下だ。」

というか、イメージのしやすさが重要だっていうなら、別に原作の魔法陣にこだわらなくていい気がしてきた。

んー…。イメージしやすく、それっぽいものか…。

「おっしっ！！！！出来た！！いやあ…ながかったなあ…ここまで…。」

俺の足元には、灰色の線で描かれた対極図まかたまが現れていた。  
対極図って言うのは、黒と白の勾玉をくっ付けたようなアレだ。いまは灰色だけ。

「うむ、断言できる。原作はこんな魔法陣じゃなかった。」

我ながら思い切ったことをする。

でも、これで分かったことがある！魔法にはイメージが大切だと！

！…多分、恐らく、きつと？

「まあこれで、魔法の練習にもやりがい生まれるってもんだよな！……しかし、魔法の練習を始めてから独り言が増えた気がする……。」

魔法への第一歩の代償は少しイタイ子になることだったようです。

時は流れて、今は小学3年生の春。

俺の記憶が正しければそろそろ原作が始まるはずだ。

「それでは、今日はドッジボールをしましょう。」

いまは体育の時間。

体育教師らしからぬ？ 気弱だけでも、優しい先生が今日の授業はドッジボールだと告げる。

ドッジボールはいいね。前世でもドッジボールは得意だったし、剣術で身体を鍛え始めてからというものの歳を追うことに運動能力が人間離れしてくる自分に少し引いているぐらいだ。

本当に、磨けば磨くほど伸びる。いまなら軽くあらゆる世界記録が抜けるだろう。

ただ、そうなると困るのは、今度は力加減だ。

まさか、小学三年生の子供相手に本気を出すわけにもいかない。

いかないのだけでも…。

「今日こそアンタに勝つ！！！」

みんなが『また始まったよ』という目で見てくる。

「いい加減諦めるアリサ。何度やっても勝てないじゃないか。」

「ふんっ、今まではたまたま調子が悪かったのよ。女の子にはそういう日があるの！」

そこで一旦、芝居がかったような仕草で髪をかきあげ、そして俺を指差しアリサが宣言する。

「そう……、今まではあの日だったのよ！！！」

.....。

この負けず嫌いなお嬢様は何を言っているか自覚があるんだろうか。

ふふんっ、と鼻で笑いながら勝ち誇った笑みを、なぜか（ココ重要）  
浮かべるアリサ。

真実を知ったときに彼女はきつと羞恥心で死ぬことが出来るだろう。

と、そこで俺が生暖かい視線で見守ってあげていることによつやく  
気が付いたのか、

「な、なによ！ 何か言いなさいよ！！！！」

「アリサ。中途半端な知識は身を滅ぼすぞ？」

「は？」

知らないほうが幸せな事だっただけあるんだ。

……だから、実奈。そんなしれっとした顔でアリサに耳打ちなんてしてやるな。

ちなみに実奈は3年生になった今年から俺達と同じクラスになった。  
…兄妹で同じクラスっていいのだろうか？

「~~~~ツノノ」

茹でダコみたいに、一瞬で赤くなるアリサ。ついでに口もパクパクさせている。

これは本当に羞恥心で死ぬかもしれない。

そして、実奈。お前は悪魔か。

ついでにそんな知識をどこから仕入れてきた。兄ちゃん心配だぞ。

「こ、殺すっ！！アンタは殺す！！」

真っ赤な顔に、涙目で殺害宣言をするアリサ。

周りのみんなは急に怒り出したアリサにドン引きしている。そりゃさっきの発言の意味を分かってないからこの怒りようは理解できないだろうな。

『ね、ねえ……天宮さん？どうしてバニングスさんはあんなに怒り出したの？』

『うん……短気なところはあるけど、さすがにあそこまで怒っているのは見たことないよ。教えてくれないかな？』

………なんだろう、端のほうでなにやら不穏な会話が聞こえる気がする。

『うん、それはね………。』

わが妹ながら、この娘は本当に悪魔の子なんじゃないかと疑いたくなる。

実奈。お前はアリサを社会的に抹殺するきか。

「ちょっと実奈やめなさいよっ！……！」

同じく気が付いたアリサが実奈を止めようとする。

『／／／／』

が、時既に遅し。

不幸中の幸いは伝わったのは女子のみだと言うことだろうか。

実奈は男子嫌いの気があるから、男子の近くにはあまりいかないのだ。

まあ、そんなことはどうでも良い。

いま重要なのは、この怒り狂う金髪お嬢様<sup>ヒステリックむすめ</sup>をどうするかだ。

「はい、良い感じに盛り上がってきたようですし、ルール説明とチ

ーム分けしようね。」

これが盛り上がっているように見えるならあなたは病院に行ったほうがいいです。っていうか、先生今まで傍観してましたよねえ！？

だが、俺の心の叫びを無視して先生は説明を開始する。

「ルールは、20分間の試合を終えた時点で、外野の人数が多いチームの方が負けです。そして、チーム分けはバニングスさんと天宮君をチームリーダーとして、皆さんが好きなほうのチームに自由に入ってください。」

前言撤回。

気弱で優しいなんて嘘っぱちだ。この先公は腹黒で性根が腐ってやがるっ！！

っていうか、いい年して語尾に「なんかつけてんじゃねえ！！！」

「殺す殺す殺す殺す…ッ!」

「ちょっとアリサちゃん落ち着いてほしい…なの…。」

「ア、アリサちゃん?こ、怖いよ?」

わがクラス40名弱。いまや修羅と化したアリサのチームにつく者は、なのはとすずかのみ。

そして残りは当然、天宮チーム(笑)だ。

うん。みんなの反応は至極当然。  
俺だってあんなヒスってる女のチームなんかには行きたくない。

ただ、こんな状態で相手のチームに勝つとなると全滅させるしか方法はない。

そしてそのとき、俺に負けたときのビジョンがふと頭に浮かんだ。



アリサの全身全霊を籠めたボールが俺に飛んでくる。

小学三年生にはありえないぐらい速くて力の籠ったボールだ。  
だが、所詮は小学三年生の球。俺の敵ではない。  
難なくキャッチしてしまう。

「なんで取れるのよっ！！F。CK！！！」

「女がそついうこと言っちゃダメだろ！？！」

「うるさい！うるさい！うるさい！！！！！」

ダメだ、完璧に切れているらしい。

とにかく俺はアリサチームを全滅させなければならない。

となれば、まずは弱点を攻めるのが勝負での定石！！！！

「ってことでお前なのはっ！！！！！」

「にやああああ！！？」

全力全壊と言いつつも、しっかり手加減をして、しかしかなり大人

気ない力を籠めて投球する。

なのは既にボールを取ることを放棄してしゃがみこみ頭を手で覆っている。

だが、俺のボールがなのはを捉えることはなかった。

「クソッ、すずかが居たんだったッ!!」

そう、しっかりと俺の大人気ないボールをキャッチしているのはすずか。

「いたた…。天宮くんこんなボール女の子にぶつける気だったの?」

少し涙目で上目遣いのすずか。

ここでそれは卑怯だろっ!? 罪悪感とかもうホントひどいんですけど!!

別にアリサとかにこんなことを言われてもどうってこと無いが、すずかはダメだ! なんかオーラが違っっ!

「なのはを狙うなんて良い度胸してるじゃない!」

「お兄ちゃん、サイテー。鬼畜。」

なんか外野がうるさい。

そして実奈。お前はどっちの味方だ。

それにこの状況の原因はかなりの部分お前のせいって分かってる？

っていうか、内野なのに外野ってこれ如何に？……………生まれ  
きてごめんなさい。

その後は尋常じゃない罪悪感に襲われた俺が、ボールをゆるくしか  
投げられなくなったことや、すずかの徹底した俺以外の内野つぶし  
のせいで、終わってみればかつて無いくらいの大敗だった。

「ああ、なんたる不覚…。あれぐらいのプレッシャーも跳ね除けら  
れないとは。」

あの後威張りくさるアリサにはうんざりした。そして自分のへたれ  
さを改めて痛感して落ち込んだ。

「お兄ちゃんなにぶつぶついつてるの？キモイよ…？」

散々だった。

鬱々とした気持ちの中、午前最後となる授業を受けていた。

授業内容は、簡単に言って『将来について』だ。

この授業には見覚えがある。それはつまり原作が始まったということ。

ただ、それには大した感動はなかった。

それよりも俺は気にかかることがあった。

「将来――――やりたいこと、か。」

## 第六話（前）（後書き）

ドッジボールってドッジ？ドッチ？どっちだろう。

本当に生まれてきてごめんなさい。

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 第六話（後）

お昼休み。

俺はなんとなく周りの人間の『やりたいこと』ってやつを聞いてみたくなった。

「なあ、みんなは将来やりたいこととかあるのかな？」

アリサ、すずかはどっかで聞いたような…原作だな、将来の夢を語る。

まあ、それはもはや夢なんてものじゃなくて将来設計っていうんだけどな。

「なのはは？」

「えっと…漠然とだけど…、私は人の支えになれる人間になれるようになりたいな。ううん…支えじゃなくて守れる人間になりたいの。ほんのささやかな日常を守るだけでもいい。私はその大切さがある人から教えてもらったから。」

そう言つて、俯きながらもちらちらと俺やアリサ達を見るのは、  
恥ずかしかったんだな。

「なのは、なに恥ずかしがつてるんだよ。」

「にははは…だつてこれじゃ将来の夢っぽくないなあつて…。」

「いやいや、将来の夢なんて普通はなのはみたいなのを言うんだよ。  
その2人は小学三年生だつていうのに枯れすぎだ。」

「あんた、私とすずかに喧嘩売ってるの？」

アリサはある意味ノリがいい。そんなノリのよさは早くどこかに捨ててくることをお勧めするが。

「そんなことない。事実を言つたまでだ。ついでに言えばドッジボールのこととかは関係ないからな。」

「めちゃくちゃ根に持つてるじゃない!!」

「そんなことはない。それに悔しかったら、将来の夢はお嫁さんともも言つてみる。」

我ながら寒いことを言つたものだ。

アリサは鼻で笑っているし、すずかも苦笑いだ。

「おれはなのはの夢は立派だと思うし、協力もする。だから頑張れよ?」

「う、うん。がんばるの!!!」

なのはは原作の夢とは全然違ったな。少なくともこの時点でこんなにもはっきりと自分の夢を主張していた記憶は無い。

「そういうあんたはどんな夢よ。人のことを馬鹿にしたんだからさぞかし立派な夢なんでしょうね?」

むう…そう来たか。

ぶっちゃけ自分にそんな夢がないからこの話を振ったのに、こう来られると困る。

「そうだな、俺は日々を平穩に暮らしていければいいよ。今の生活に俺は満足しているし、かけがいの無いものだとも思っている。でも、この生活がずっと続かないことも分かっている。俺達はいつか大人になって、今感じているこの気持ちもきつと忘れてしまう。でも、おれはずっとこの気持ちを忘れない。忘れない為にも大人になんかならない。…つまりは、働きたくないでござるっ!!!!!!」

「ダメ人間じゃない。っていうかそれってニート?ますますダメ人間ね。」

こいつ2回もダメ人間って言いやがった。

まあ後半はともかく、前半の話は俺の本音だ。

逆に言えば、今の生活に満足しすぎていてこれ以上望むことなんて無いっていうのが、俺のやりたいことが見つからないことの原因なのかもしれない。」

「これ以上ダメ人間の相手をしていたら私たちまでダメになりそうね。実奈はなにか将来の夢あるの？」

早々に俺に見切りをつけて、今度は実奈に話を振るアリサ。

「お、お兄ちゃんのお嫁さん……………／／／」

「ブツツ……………」

思わず飲んでいたお茶を吹いてしまった。  
な、なにを言っているんだ実奈さん！？

「なに動揺してるの？冗談に決まってるじゃない。」

気が付けばそこには、いつものジト目の実奈がいた。

こんな日常は嫌だ。

さて、そうして放課後。

俺達は塾へ行く途中、ケガをしたフェレット……もといユー・スクライアを見つけ、今は動物病院にいる。

ユーノはケガのせいでグッタリとはしているが、意識はあるようだ。

『もしもし、聞こえる？こういうのは始めてなんだけど。』

ぶつつけ本番で念話をやってみる。念話って言うぐらいだから、念じておけばいいんだろうけど。

ピクリと反応するユーノ。どうやら成功のようだ。

そのユーノに向かって俺が念話の相手だということをアイコンタクトで教える。

『もしかして、僕の声聞いて助けてくれたんですか？』

『そうだね。ちなみに、君の声が聞こえたのは俺と君を抱いている女の子だよ。そっちの子は声が聞こえたのはまだ気のせいかな何かだと思っっているみたいだね。』

『驚いた…こんなに近くに魔法資質のある子が2人もいるなんて…。その、まずは助けてくださってありがとうございます。』

そう言つてペコリとお辞儀するユーノ。  
さすがにそれは不自然だと思っけれど、女の子達は喜んでいいからいいか。

『それで…助けてもらつておいて言うのも心苦しいんですが…、実は僕の声が聞こえたお2人をお願いがあるんです！』

『……それは、2人共に頼まないといけないことなのかな？』

どんなお願いか既に知っている俺は少し思うところがある。  
だから少し話をする。

『…はい。僕のお願いは危険を伴うものなんです。そんなものに巻き込んでしまう人を増やすのはよくないことは分かっています。でも、1人で挑むより2人で挑む方が安全……そして確実です。それにあれを放置してしまうのは本当に危険なんです…ッ。』

たったこれだけ話しただけでも、どれだけユーノが切羽詰っているのかは伝わってくる。

彼は本当に誠実で、責任感の強い人間のようなのだ。

『俺はともかくとして、もう一人の子……なのは本当に優しい子で、それに何より頑固なんだ。もし君が、君の言う危険な頼みごとをしたなら、彼女はどんなに危険でもきつと最後まで無理やり手伝おうとする。…それでも彼女を巻き込むんだね？』

真剣なまなざしで俺を見つめてくるユーノ。

『……………それでも、です。』

『……………君の覚悟が聞けてよかった。幼馴染をいい加減な気持ちで危険な目に合わせるようだったら、傷口にからしを塗ってやるつもりだったよ。…それじゃ、なのはもこの会話に参加してもらおうか。』

いい笑顔で言っていると、ユーノは涙目になって震えだした。  
このフェレット感情表現がとても豊かです。

その後、なのはを交えて事の経緯を聞くことになった。

最初念話を受け取ったときのなのはのテンパリようと云ったら中々におもしろいものだったが、今は極めて真面目な話をしている。

『で、うちかなのはの家になりそうなんだけどどっちがいい？』

『そ、それって僕が決められることなんでしょうか？』

『多分うちもなのはの家もOKもらえるからな。ただ、うちよりもなのはの家の方が待遇がいいと思うよ。それにあの家は化け物が既に居るから安全対策もばっちりだし。』

『えっと、うちは食べ物商売だから分からないよ？』

『大丈夫。なのはの家族のことなら良く分かっている。間違いなくあの人たちはOKをだす。』

おお、ユーノが考えている考えている。

『まあ今すぐじゃなくてもいいよ。それと、すぐに出かけることになるし今は身体を休めておいた方がいいよ。』

『あ…はい、そうさせてもらいます。』

『それと、俺にも敬語やめてくれないかな。一応同年みたいだし

さ。』

『えっ…、ああ…そう、だね。それじゃ涼、なのは、また後で!』

そして塾も終わり、俺となのはこっそりと2人だけであの動物病院へとやって来ていた。

『ユーノ? 着いたから抜け出してきてくれるかな?』

『うん、わかった。』

俺達はこれからユーノにケガを負わせた化け物……既に発動しているジュエルシードを封印しに行く。

「怪我は大丈夫なの?」

「うん、ちゃんと治療も受けたし、魔力を治癒に回せたおかげでかなりよくなっているよ。」

そっいつて、包帯を外してみせるユーノ。

確かに身体のケガはない。

「でも、まだ魔力とかは回復できていないから、結局は2人に頼ら

ないといけないんだ…。」

そういつて、シュンと萎れるユーノ。

「そう萎れないでくれ。心配しなくても俺達で封印していくから。」

「それで場所はわかってるの？ユーノ君。」

「うん。今は涼たちが僕を見つけた公園の林の中をうろろろしているみたい。あっちもかなり弱っていたみたいだから、人を襲うとかそういうのはしていないみたい。」

「なるほど。あそこなら人も居ないだろうし、ちょうどいいね。それじゃ移動する前に早く行こう。」

そうして、俺達は最初の林へと戻って来ていた。

辺りはもう暗くなっていることもあって、夕方とは打って変わってかなり不気味な雰囲気醸し出している。

「さっきも説明したように、封印はこのデバイス…レイジングハートを使ってしか出来ないと思ってくれていい。それで、どちらか一方に封印をしてもらうことになるんだけど…涼、君は本当に困になるつもりかい？相当危険な役目だよ…？」

さっきまで行っていた打ち合わせでは、ユーノは俺にレイジングハ

ートを持たせて、なのはとユーノの2人で俺をサポートする作戦を提唱していた。

だが、それは正直ベストとは言えない。

ユーノは封印を行う俺が一番危険だと言っていたが、俺から言わせればユーノとなのはの2人の方が危険だ。

まずなのはさつき魔法を知ったような素人、そしてユーノは今魔法をまともに使えない。

もしも、敵の目標が2人に行った場合ひとたまりも無いだろう。

だから俺が囷になる作戦を発案した。

それに、いまここで一番戦力の状況が分かっているのは俺だ。

「……ッ      もう作戦会議は終わり！敵が来たぞ！予定通り俺が囷になってるからその間に封印よろしく！」

まだジュエルシードの暴走している感じっていうのは分からないけれども、剣術で養った危機察知能力が敵の到来を告げている。

後ろの方では、なにやら慌しく2人が動いている気配がするが今は敵に集中する。

さて、初めての实战だ。

まずはどこまで出来るかを確かめさせてもらおう。

そうして俺は俺だけの魔法陣――――灰色の対極図を発動させる。

そして、自身の身体に魔法という奇跡を起こす。

そこまですたところで、毛むくじらのズングリムツクリが俺に向かって猛烈な勢いで突っ込んできた。

それを俺は悠々と跳んで避ける。

まるで身体が羽になったかのように軽い。――そして、その実俺の身体は羽程度の重さしかなくなっている。

跳びあがった俺は、今度はあらかじめ拾っておいた石をズングリムツクリの化け物へ投擲する。しかしただの投擲ではない。その石には俺の手から離れる瞬間に魔法を叩き込む。

そして、なんの変哲も無いはずの石は、地上に居る化け物の身体を貫通し、それだけには留まらず周囲の大地をも揺さぶった。

――俺の魔法が弄ったのは物質の質量。

俺の身体を羽のように軽くし、そしてただの石を50tの重さに変えたのだ。

物質には慣性と言うものがある。

慣性は質量の大きいものほど強く働く。

では、速度の乗った物質の質量を大きくしてやればどうなるか――  
――結果はタダの石が軽い地震を起こすほどになる。

「って全然効いてないな…、やっぱり思念体っていうだけあって物理攻撃はあんまり効果ないか…。」

見ればジュエルシードの暴走思念体は、既に今攻撃された箇所を再生し始めている。

「でも、再生中は動けないみたいだ、なっ―!」

俺の今回の仕事は時間稼ぎだ。

となれば、さっきみたいに石をぶち込みまくればいいということだ。

とりあえず、あらかじめ拾っていた石を思念体へと文字通り打ち込み続ける。

石のストックが無くなれば、今度は木の枝を使い串刺しにしてやる。

俺は丸腰だったが、その気になればいくらでも武器になるものは調達できる。周りにあるあらゆる物が俺の武器になることができるのだから。

そして、ようやくモタモタしていたなのは準備が整ったのかジューエルシードが封印された。

「あううゝ、脳が揺れているうゝゝ。りょうちゃんやりすぎなの！」

「え？ああ…ごめん、俺ずっと跳んでたから全然揺れとか気にしてなかった。そっいえばかなり揺れてたかも？」

「揺れていたかも？じゃないの！木を投げ始めるまで封印どころじゃなかったの！！」

「あはは…確かに…。でも涼は珍しい魔法を使うんだね。あんな魔法陣も魔法も僕は見たことが無いよ。」

「うん。魔法陣は試行錯誤の結果あなつたし、攻撃に使っていた魔法に到っては空を飛ばうとしたら出来た偶然の産物だしなあ。」

あのときの事を思い出して苦笑いが浮かぶ。

「空を飛ぶためには、身体を軽くしたらいいって思ってたイメージしたら、本当に軽くなつてさ。その時に丁度突風が吹いて飛ばされたときには本当に焦ったね。まあ、結局無事だったし、新しい魔法も出来て結果オーライだったんだけどね。」

それにこの魔法は応用が利いて重宝すると俺は思っている。

「それより、なのはもお疲れ様。お腹も減ったし帰ろうか？」

「うん！ところでユーノ君はどうする？」

「えっと、一応動物病院の方で今日は泊まろうかなって思ってるよ。それで、明日からは…なのはの家にお世話になつていいかな？なのはにはもっと魔法のことを知っておいてもらった方がいいと思うんだ。そうなるとなのはの家の方が都合がいいし…。」

「うん！わかったよユーノ君！でも今日聞いてみてダメだったらやっぱりうちさんの家に行ってもらうことになると思うの。」

「うん、それは分かっているよ。」

「心配しなくても大丈夫だって。それとユーノには俺も魔法を教えてもらいたいんだ。正直魔法は全然出来なくってさ……。」

「もちろん！こつちがお願いを聞いてもらっている立場なんだ。僕が役に立てることならなんでもするよ！！」

「ありがとう。……ああ、そう言い忘れていたけど、なのはの家では絶対にその姿で居た方がいいよ。もし、男子がなのはの部屋に泊まっていると知ったら……多分殺される……。」

「え……………」

「…………えっと、どういことなの？」

「なのは。ユーノは人間だ。」

残念ながら。

『ふええええええええええ！？』

その日一番の驚きがなのはを襲ったのだった。

色々あった一日だったが、こうして俺達のジュエルシードを巡る戦いは始まった。

## 第六話（後）（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております

## 第七話

「ああ、そうだ涼君。今度の日曜日翠屋JFCで欠員が出そうなんだけど、ちよっと手を貸してくれないかな？」

ジュエルシードのことはあるけれども、発動前にはあまり見つけることが出来ないこともあって、何時も通りの鍛錬をしに高町家へと来ている。そしてその休憩時間に士郎さんに声を掛けられた。

まあ、出ること自体はいいんだが…。

「ええ、いいですけど…。でも僕が入ってもいいんですか？翠屋JFCって確か上級生中心でしたよね？3年生が入ると先輩達のプライド的に…。」

「大丈夫大丈夫！うちの奴らにそんな事を気にするような奴はいないさ。それに涼君がきてくれないと10人で試合しなくちゃいけなくなるからね。」

「りょうちゃんがサッカーの試合に出るの？」

「おお、そうだぞなのは！試合は今度の日曜日だ。良かったらご両

「親達も呼ぶといいよ。」

「私もアリサちゃんたちを誘って応援にいくの！！」

「そりゃいい。女の子の声援があればみんなもやる気倍增だな。なあ涼君？」

「そこで僕に振らないでくださいよ。」

苦笑しながら士郎さんに応える。こんなときにさらりと流せないのはまだまだ子供っていうことなんだろうなと思う。それにしても父さんと母さんを誘う、か……。そういえば最近みんなで出かけることも無かったし、家に帰ったら誘ってみようか。

「ただいま。」

鍛錬を終えて帰宅する。早速試合のことを話してみよう。

「おかえり涼。今度の日曜日高町さんのチームでサッカーの試合に出るんだって？父さん達も応援に行くからしっかり頑張るんだぞ！」

なぜか、先に言われた。

「う、うん。でもどうして知ってるの？」

「実奈がなのはちゃんからメールをもらって父さんと母さんに嬉しそうに話に来たからね。一緒に応援に行こう！ってね。」

「お、お父さん何言ってるのっ！！」

見ればリビングのソファに座っていた実奈が顔を赤くしてこっちを見ていた。

「ありがとう実奈、応援にきてくれるんだね。」

「別にお兄ちゃんの応援に行くわけじゃありません。お兄ちゃんが何も出来なくてオロオロしている姿を家族みんなで笑いに行くんです。」

そう言って実奈はそっぽを向いてしまう。

「それは嫌だなあ。そうならないように頑張るよ。」

「涼ちゃんなら大丈夫だよー？きつとホームラン打ってくれるよ！！」

「母さん、出るのはサッカーの試合だから…。」

「あ、あれえ…？」

母さんのボケに、家族みんな自然と笑いが漏れる。

実奈の言つとおりオロオロしないように少しサッカーの練習しておこうかな…。

そして、試合当日の日曜日。

天気は快晴！絶好のサッカー日和だ。

『涼あがれあがれー！！』

少し心配していたけれど、土郎さんの言うとおりチームのメンバーはみんな気さくな人ばかりだった。  
なんというか、凄く土郎さんのチームらしかった。

そして、気合の入った俺は既にハットトリックを決め、今も自身4点目になるゴールに迫っている。

『涼ちゃんしっかり〜！ホームラン〜。』

『涼きめろー！！』

それにしても、親の声援がこんなにも恥ずかしいとは思わなかった。  
というか母さんまだそのネタ引っ張るの？

『ピッピッピイイイイイー！！』

試合を終えてみれば、翠屋JFCの圧勝だった。……少し頑張りすぎたかもしれない。

チームメイトの上級生達は俺をもみくちゃにしながら口々に、『このままうちのチームに入らないか？』とか『全国狙えるぜ！』とか言うてくる。

でも……俺も少し満更でもなかった。

神に与えられた素質のおかげで、この歳にして人間離れしてきた運動能力もある。

正直な話、俺は原作に介入していく意味を見出せていなかった。

今までは全部成り行き。

転生してきたことすら流されての結果だったはずだ。

- - - - 俺のやりたいことって何だ。

別に俺がなのは達の世界に介入しなくなっただけで、彼女達は全てをうまくやる。

- - - - 流されるまま、彼女達に関わっていいのか。

今ある幸せをかみ締めるだけで十分なんじゃないか？

- - - - だから俺は…。

試合の後、翠屋に移ったの昼食会の最中でも、俺はずっともやもやした感じを抱えていた。

「どうしたの、お兄ちゃん？どっか具合でも悪いの？」

そんな事を考えていたせいか、実奈に心配されてしまった。  
この子はなんだかんだいって俺のことをよく見ている。

「大丈夫。ちょっと考え事してただけだから。心配かけてごめん。」

「別に心配なんてしていません。近くで不景気な顔をされるとせつかくのご飯がおいしくなくなるんです。」

どうやら、心配していたんじゃないくて、目障りだったみたい。

「ごめんごめん。そういえば母さんと父さんは？」

「さっき先に帰るって言うてたよ？お兄ちゃんにも声掛けてたのに、ちよっとボーっとしすぎじゃない？」

「え…？ああ、そうだったね。あはは…。」

実奈の言う通り少しボーっとしすぎてたかもしれない。

「！！ッ」

そのとき頭の中で直接鈴を鳴らされたような感覚があった。

これは最近感じれるようになった、ジュエルシードの気配だ。

そうだ…、思い出した…。

今日は、翠屋JFCのメンバーの1人がジュエルシードを発動させてしまうんだ。

俺はすぐにそれを阻止しようと立つて…

「………」  
「いまある幸せをかみ締めるだけでいいんじゃないか？」

すぐに座ってしまった。

「何してるのお兄ちゃん？本当に変だよ？」

「なんでもないよ。…うん、なんでもない。」

別に俺が何かしなくなっただけ、なのはうまくやる。

原作でも最後にはハッピーエンドだったじゃないか。

そう、俺は今の生活を守っているだけでいいんだ。

「って、そんなわけないだろうっ!!」

「お兄ちゃん!？」

「ごめん、ちょっと用事できた!先に帰ってていいから!!」

なにやってるんだ俺は。

目の前でジュエルシードが発動するっていうのに、何もしないなんてどうかしてた。

翠屋を飛び出した俺はさっき感じたジュエルシードの感覚を追って走っていた。

「みつけたっ！！ちょっと待ってくれっ！！」

ジャージ姿の男の子と、女の子が交差点の信号で止まっているのが見えた。

間違いない。あの男の子がジュエルシードを持っている。

俺の呼びかけに気が付いている気配は無い。

そして、男の子と女の子が手を合わせたとき。  
ジュエルシードが発動した。

「間に合わなかったっ……！」

発動したジュエルシードは、木へと変化し。そして海鳴の街を飲み込みながら見る見るうちに成長していく。

とりあえず、俺は巻き込まれないように離れる。

『なのは！気づいているか？』

『うんっ。今家から外に出るところ。』

『今発動させた人間の近くに居る。なのは、俺のいる場所わかるか？』

『に、人間…？』

『今回ジュエルシードを発動させたのは翠屋JFCの子だ。それで俺の場所がわかるか？』

『（やっぱりあの子が持ってたんだ…）うん、わかるよ。』

『よし、それじゃ俺が核になっている部分を露出させるから封印を頼む。』

『わかったの！』

ユーノに魔法を教わり始めてまだ一週間ほどだが、やはり教わることは大きい。

この一週間で俺の魔法は飛躍的に伸びた。

中でも俺は『変化』とかそういう分野に置いては圧倒的な才能がある。とはユーノの言葉だ。

空中へと飛びあがった俺は、おなじみの魔法陣たいきよくすを作り出し、右手に燃え滾る焰をイメージする。

すると俺の魔力が変質した火の玉が右手の上空へ現れる。火の玉と言うとちやちな物に思えるかもしれないが、直径10メートルはある特大サイズだ。

火の玉の熱量で肌が文字通りチリチリと焼けそうだ。

次に俺はこの大木の核となっている男女に意識を集中させる。

イメージは包み込み守る水壁。

どうやら、俺は非殺傷設定とやらが出来ないらしい。

水壁は勢い余って焼き尽くさない為の保険だ。

さて、準備は整った。

「焼き払えっ……！」

掛け声と共に右手に待機させていた焰を解き放つ。

綺麗な円形を保っていた焰は、その形を崩しながら奔流となって大木へと殺到する。

圧倒的な焰の前に大木は一瞬で焼け崩れていく。

『いまだなのは。封印頼む。』

『わかったの！』

なのはの砲撃魔法によって、桜色の魔力光が今度は押し寄せる。

ジュエルシードの封印と同時に、大木は元通りに消えていく。

だが、海鳴の街に傷跡は残る。

俺はなのはのいる場所まで飛んで行き、着地する。

「りょうちゃん…、私のせいでたくさんの人に迷惑かけちゃった…。  
…私気づいてたはずなんだ、あの子がジュエルシードを持っている  
って。でも勘違いだっておもっちゃったの。」

俺を見るなり、そんなことを言うなのは。でも違うんだ。

「違う。なのはのせいじゃない…全部俺のせいだ。なのはと違っ  
て俺はあの子が持っていることも、ジュエルシードを発動させてし  
まうことも分かってたんだ。…なのに動かなかった。海鳴の街を  
傷つけたのは俺だ。中途半端な気持ちでジュエルシードに関わった  
ツケが回ってきたんだ。…笑っちゃまうよな、人には偉そうに覚悟  
だなんだって言っときながら、自分<sup>テメー</sup>が一番半端やってたんだ。」

「2人とももうやめてくれ！ 2人はちゃんとやってくれている！  
元々は僕が原因なんだ、2人は僕を手伝ってくれているだけじゃないか！責めるならジユエルシードなんてものをこの世界に持ち込んだ僕を責めてくれっ！」

「ユーノ、それは違う。ユーノを手伝うと決めたときから責任はもう俺にあつたんだ。その責任を人に押し付けるなんてできない。  
自分の不始末のツケは自分で受け止めなければならぬ。どんなにつらくても。」

でも、俺はこのとき自分の不始末のツケの、本当の大きさにまだ気がついていなかったんだ。

俺の携帯が鳴る。

-  
-  
-  
-  
P  
r  
i  
r  
i  
r  
i  
r  
i  
i  
:  
:

「…………はい。」

『ひつぐ…お、お兄ちゃん…？どうしようお父さんが…ぐすっ…  
お父さんがっ…それにお母さんも…うぐ…ねえ…どうしたらいいの…』

…お兄ちゃんッ…』

「どうしたんだ実奈っ！？何があつたんだ？父さんと母さんがどうしたんだっ…。」

いつも澄ました顔をしている実奈が、電話越しにも分かるぐらい泣いているなんてよっぽどのことが無ければありえない。

「……………じ、事故……………」

目の前が真っ暗になった気がした。

## 第七話（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 第八話（前書き）

恭也さんマジケメン!!!

## 第八話

- - - 不始末のツケは大きかった。

その日俺は大切な家族を2人も失った。

父さんと母さんの死因は、大量失血。

車に轢かれた母さん達は、従来ならば助かるはずだった。

しかし突然発生した大規模災害に病院は混乱し、更に災害の影響で封鎖状態の道が数多く発生した結果、母さん達が病院へ搬送されるのが遅れた。

病院へ担ぎ込まれてすぐに2人とも息をひきとったそうだ。

気が付けば、葬儀は終わっていた。

葬儀の最中も、実奈はずっと泣いていた。それだけは良く覚えてい  
る。

実奈を再婚まで男手一つで育てた――――唯一血のつながってい  
る父親が亡くなったのだから無理も無い。

殺したのは俺だ。

――俺には実奈に合わせる顔がなかった。

『子供達はどうするの…』 『実奈ちゃんはうちが引き取りましよう。それで…』 『あの子は…』 『どこの馬の骨…』 『うちは嫌ですよ…』 『勘弁してくださいよ…』

葬儀を終えてから親族会議が催されていた。

議題は両親を失った俺達義兄妹をどうするか。

子供が聞くことではない、と俺達は追い出されたがこうして盗み聞きしている。

そして会議は難航している。俺が原因で。

それもそうだろう。結局母さん方の親族は葬儀にすら出席しなかった。

つまり今会議をしているのは実奈方の親族だけだ。故に実奈はすぐに引き取り手が見つかったが、俺はそうもいかない。

誰も俺をお荷物として押し付けあっている。

正直今の俺にはお似合いだと思った。

いつそのまま放っておいて欲しいとすら思う。

親族会議がただの罵りあいになったところで、俺は外へとでた。

不思議な事に、母さん達が死んだときから一度も俺は涙を流していなかった。

悲しいはずだった。でも、それ以上に後悔と喪失感で呆然としていた、と自分を分析している自分がつくづく嫌になった。

「…お兄ちゃん。どこ行くの？」

後ろで呼びかける声が聞こえた。

振り返らなくても誰か分かる。

「ごめんな実奈。俺はもう兄なんて呼ばれる資格なんかないんだ。  
…ごめん、いいお兄ちゃんになれなくて。」

それだけを言い残して、俺は跳んだ。

これ以上実奈の前に居るのは耐えられなかった。

「…最低だ、俺…。」

それから3日。

自分の抱えた気持ちをどうしようもなかった俺は、山の中で体力の続く限り暴れ、倒れ、目が覚めてはまた暴れるということを繰り返した。

こんなことをしても何もならないということは分かっていた。でも、どうすればいいのか分からなかった。

何回目か分からない体力の限界に、また倒れた。

3日何も口にしていない。人間は水を1週間飲まないと死ぬんだっけ？

身体を動かしている過程でかなりの水分を失っている俺はもうすぐ死ぬかもしれないな。

それもいいかもしれない。

少し面白そうだな、なんて思っ  
てこの世界に転生したことが間違  
いだっただ。

だんだん意識が保てなくなっ  
てきた。

次に起きることはあるんだろう  
か。

別に起きなくてもいいな、と  
思った。

――ザバァーッ

「ブッハッ…ゴホッゴホッ…  
な、なに…ゴホッ…」

「よう、やっと起きたか涼。」

「ゴホッ…恭也さん?…どうしてここに?」

急に息が出来なくなつて飛び起きれば、目の前には何かの入れ物をヒラヒラと振っている恭也さんがいた。

というか、息が出来なくなつたのと俺がずぶ濡れになっているのは間違いなく恭也さんのせいだろう。

「どうしてもこうしてもない。心配して探してみれば、当の本人はこんな山奥で大の字になつて寝てるもんだから少しむかついてな。」

非常にいい笑顔で応える恭也さん。間違いなく怒っているな。

「それにしてもなんだここ。天変地異でも起きたのか? そこら中クレターだらけだし、木が焼けたりなぎ倒されたり。まあ、こんなだから涼を見つけたんだだけだな。」

改めてみれば、俺の周りはひどい有様だった。

かなりの広範囲にわたつて破壊の限りが尽くされている。森林保護団体がみたら卒倒物だろう。

「にしても、やつれたな涼。この3日間なにも食べてないのか?」

「……ええ……まあ……。」

「はあ？なにやってんだ。ほんとに死ぬぞ？」

「……………」

死んでもいいと思っていた手前なにも言えなくなった。

「はあ…、とりあえずこれ飲めよ。いらなとか言うなよ。兄弟子としての命令だ。」

といって小型の水筒を渡してくる恭也さん。

有無を言わせないプレッシャーをかけてくる。受け取らないわけにはいかない。

「…いただきます。」

そして、俺が水を飲んだのを確認してから恭也さんは話し出す。

「んで？なにがあつたんだ？」

「……………」

「なにもないのに、こんなところまで来るわけないだろ？」

恭也さんには悪いけれど、話す気にはなれない。

人に話せば楽になれるとか良く聞く話だが、俺は楽になっではいけない。

「涼。話にくいことがあるのは見ていれば分かる。でも俺は聞かないといけないんだ。今の涼にはきつと周りを見る余裕はないんだろうけど……、少し周りにも目を向けてくれ。」

妙に回りくどい言い回しをする。

なにが言いたいのか良く分からない。

「なのはが涼のご両親が亡くなったって聞いてからずっと何か思いつめているんだ。なにかあったのかって聞いても『私のせいだ……』って繰り返すだけだな。」

「……ッ」

失念していた。ジュエルシールドが海鳴の街を襲ったあの日、なのははこうなったのは自分のせいだと思いつめていた。

違う。今回のことはなのはのせいなんかじゃない。

全部俺のせいだ。そうあの時ちゃんとなのはにも言った！　なのは  
が思い悩む必要なんか無い。

それなのに俺は自分のことしか見えてなくて、こんなところで腐っ  
て…。

なのはにもう一度言わなければならない。

なのはは何も悪くない。

いつものように明るく笑っていればいいんだって。

「どこいくんだ、涼。」

一刻も早く行かなければならないと、飛び出そうとした俺を恭也さ  
んが言葉で制す。

「どこって…なのはのところに！　はやく行かないと…！」

「待つんだ。そんな思いつめた顔をしているやつをなのはに会わせ  
るわけにはいかない。それに俺はまだ何も聞いていない。」

言い出したら聞かないのは恭也さんもなのはと同じだ。

そんなところばかり似なくてもいいと思うのに。

しかし、こうなると説明しないことには行かせてくれそうにもない。

「…いまから話すことは全部本当のことです。一応そう前置きさせてもらいます。」

なにしろ今までのことを話すとなれば非現実まぼうつのこととも含まれる。前置きが必要だ。

……

……

…

「つまり、なのははそのジュエルシートとやらを見逃したことで結果的に涼の両親が亡くなったことに責任を感じているんだな？」

「そうです…。でもあれはなのはのせいなんかじゃないっ…。早くそれを伝えに行かないと…。なのはが責任を感じる必要なんか

ないんだって。」

「待てって。少し落ち着け。」

再び飛び出そうとした俺をまた恭也さんが押しとどめる。

「まだ何かあるんですかっ！」

「落ち着けって言っただろ？ 涼の話には信じがたいことも含まれていたが、嘘を言っていないことは分かる。そして話を聞いている限り涼の両親が死んだのは、事故だ。なのはも涼も責任を感じるべきじゃない。」

「……ッ 父さんと母さんが死んだのは俺のせいだ……。あの時迷ったりなんかしなければ……。」

「だからそれを含めても涼に責任がないって言っているんだ。」

「違うっ！」「分かった。ご両親が亡くなったのは涼のせいだ。それで涼はどうするんだ？」 だからなのはに悩む必要なんかないって伝えにいきます……ッ」

そこで恭也さんは一度目を瞑り、息をフーッと吐き出した。

怒っているようにも、呆れているようにも見えて、感情が読めない。

「要するに、涼はなのはに向かつて、両親が死んだのは全部自分の責任だからなのは気にしないでくれって言っただな？ そんなに思いつめた顔をして。」

鋭い視線に射抜かれて何も言えなくなる。

恭也さんは怒っていた。

「それでなのはが、うん分かったよ、とでも言っと思ったのかっ！  
？ そんなのは自分勝手な自己満足だっ！！ あの子ならもつと責任を感じる！ それどころか涼にそんな顔で、そんな事を言わせたことにすら責任を感じる！ あの子はそういう子だっ！」

恭也さんの怒声に比喻ではなく本当に身体がビリビリと震わされた。

「すまない。怒鳴るつもりは無かったんだ。今の涼を見ていると昔の自分を思い出してどうしても苛立ってしまうんだ。」

昔の自分というのは、土郎さんが入院していた頃のことだろう。

もう一度フーツと深く息を吐き出す恭也さん。

今度のは自分自身を落ち着かせるものと分かる。

「気が付いているか、涼。今のお前はあの頃の俺と似ている。ちゃんとやるべきことを見据える。この際ご両親のことが涼のせいだろうが関係ない。少なくとも今涼がやるべきことは、自分を責めることじゃない。」

恭也さんの言葉には重みがある。

恭也さんにとっては決していい記憶ではない過去の話をしたことで、余計重みが増した。

だけど…

「それじゃ俺はどうすればいいんですかッ…！」

三度大きく息を吐く恭也さん。今度は間違みたひいなく呆れだ。

「なのはのことは俺に任せておけ。大丈夫、あの子は強い子だ。涼は……これは俺が偉そうに言える事じゃないが……涼には涼のこ  
とを待っている子がいるんじゃないか？」

……俺を待っている子？

「実奈……？ でもあいつが俺を待っているはずない……。第一もう

親戚に引き取られてこの街にすら居ないはず。」

「ふふっ……さあな？　頑張れよお兄ちゃん。」

満足そうな笑みを浮かべて恭也さんは帰っていった。

「やるべきことを見据えろ、か…。」

3日ぶりに家へと帰ってきた。

たった3日。

それだけなのに、家は変わり果てたように寂れて見えた。

実際住む人間が居なくなっているのだから寂れて見えるのは当然ともいえる。

「……………」。

無言で家の中へと入る。

どうせ誰もいないのだ。ただいまと言ったところでむなしただけだ。

だから驚いた。

居るはずのない人間が、その長い絹のような黒髪をばさつと広がらせながら机の上に突っ伏していたから。

「なん…で…?」

思わず口から驚きの言葉がでた。

なんで机の上で突っ伏しているのか。

どうして親戚の家へ行っていないのか。

この家に留まるとしても理由が分からない。少なくとも自分は嫌われていたはずだ。

たくさんの疑問符が俺の頭を通過していったが、それも一気に吹っ飛んだ。

「なんで、じゃないです。」

俺の驚きの声で気が付いたのか、実奈が顔を上げてこちらをいつものジト目で睨んできていた。

「3日間もどこに行ってたんですか。」

言いつつ今度は立ち上がっている。

「ちょっと山奥まで…。」

「はあ！？　ありえないっ！　私がどれだけ心配したと思ってるんですか。　あんな今から自殺しますみたいな事言い残してっ！」

あー…。　確かにそう言われればそう聞こえなくも無い…。

「許さない…。」

ゆらり…と俺に向かって進んでくる実奈。

俺はと言えば金縛りにあったかのように動けない。

「許さないッ…!!」

気が付けば実奈はすぐ目の前に立っていた。

今度ばかりは何されても文句言えないなあーと心の中で自分自身へ合掌。

しかし、予想したような衝撃は来なかった。

その代わりに、ふわりと香る甘い香りと共に、柔らかい感触で包み込まれた。

実奈に抱きつかれたと気が付くのに少し時間が掛かった。

「ちょッ…な、なんで…!？」

予想もしていなかった事態に一瞬で混乱の極みに達した俺は多いに狼狽する。

でも、実奈が震えていることに気が付いて急激に頭の中は冷えた。

- - - 泣いている…。

そのことに気が付いた俺は、こちらからもそつと抱きしめ返してやる。

「ゆるさないよ…。お兄ちゃんまでいなくなるなんて、ぜったいにゆるさない…。」

「ごめん…。」

「ばか…。ゆるさないっていつてるじゃん…。」

「ごめん。ずっと一緒にいるから。だから許してくれないか。」

「ほんとに…？　ずっとだよ？　あとでやっぱなし、なんてみとめないよ？」

「そんなこと言わないよ。」

そう、実奈は俺が守る。

大切な人を失う痛みは分かった。

もうこんなことはこれで最後だ。

もう半端なことはしない。

二度と後悔なんかしないように。

「うそついたらぜったいにゆるさないよ。」

「大丈夫。 実奈こそ、俺は返品きかないからな。」

「…そんなことしないよ。 ねえ…もう少しこうしてていい…?」

ぎゅっとしがみつかれている状態で、俺が断れるはずも無かった。

実奈はその後また少し泣いた。

俺はその頭を撫でながら、自分のやるべきことを考えていた。

二度と後悔しないように。

## 第八話（後書き）

ふう……。書いているうちに挫折しそうになった……。

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第九話（前書き）

10月12日 大幅な改稿をいたしました。

## 第九話

「ふう…いい湯だ…」

今日はゴールデンウィークを利用して温泉へ行かないか、との土郎さんの誘いに乗りここ海鳴温泉へやってきた。

正直最近色々あったせいで、心身ともに疲れていたのは否定できなかった。この誘いは素直に嬉しかった。

土郎さんには両親が死んでからと言うもの、お世話になりっぱなしである。

実奈は親戚に引き取られることを拒否した為、今まで通りの生活をする事になったのだが、さすがに9歳児2人だけでこの社会を生き抜くには無理があった。

金銭的な問題は、母さん達の保険金などで多少余裕はあるとはいえ、子供だけでは法的な手続きをとることが困難だったからだ。

そこで土郎さんには、俺達義兄妹の未成年後見人となってもらった。

以来、ただでさえ沢山ある手続きを、不慣れな俺達が処理する頃にはほぼ半月ほど経過していた。

こんなところで人が死ぬということの重さを感じさせられるとは思わなかった。

この間、ジュエルシードが出てこなかったことは僥倖だった。

手続きに加え、実奈と2人暮らしを始めるに当たって本当に時間的に余裕も無かった。

もつとも、俺が腐っているうちに一度ジュエルシードが発動したようだったが。…そういえばなのはとも暫くの間話しをしていない。お礼も含めて一度きちんと話しておく必要があるだろう。

とはいえ、ようやく一段落着いたところでこの温泉だ。精一杯楽しまなければ損だ。

ただし、今日の夜にはフェイト達とジュエルシードの取り合いも演じなければならぬ。余り羽目を外しすぎるわけにはいかないだろう。

「はあ〜。いい湯だった。」

いつになく長風呂してしまった。

まあ、たまにはこういうのもいい。最近は本当に色々あったからな。

「…って、何してるんだ？みんなして廊下で。」

脱衣所から出てみれば、そこにはなにやらご立腹な様子のアリサとそれを宥める<sup>なだ</sup>のは達に出くわした。

「あ、りょうちゃん……。」「

なんだ…？　なのはが俺を見てすぐ視線を外したような…。

だが、それを深く考える前にアリサの声に思考を妨げられた。

「聞いてよ！いまものすつつつごく馴れ馴れしくて、失礼な人がいたのよっ！！」

「失礼な人？」

「そうよ！　赤い髪した女の人だったんだけど、なによあれっ！いくら開放的になってるからって、節度つてもんがあるでしょっ！」

赤い髪の女の人…。

十中八九アルフのことだろう。

「へえ…。まあ、過ぎたことを気にしてても仕方ないだろ。大切なのは今からだよ。」 大

そう、大切なのは今から。

「ところで、その失礼な女の人はどこへ行った？」

「偉そうに高笑いしながら女風呂に入って行ったわよっ!!」

なるほど。 ということは暫くはフェイトのところへアルフが戻ることは無いだろう。

と、なると…

「さてと。 それじゃ俺は少し散歩行ってくるよ。 夕飯までには戻るから士郎さんたちにもそう伝えておいてくれ。」

「は？ちよつと待ちなさいよ！ アンタ集団行動ってもんを知らないの!？」

「旅行中ぐらいアリサと実奈の小言から解放されたいのは当然の欲求。 んじゃ後よろしく。」

何か後ろから聞こえてきたけれど、俺はそのまま跳んで逃げ――  
――もとい散歩に出た。

五月の新緑の中を気ままに散歩する。

時折通り抜ける風が気持ちいい。

こついうのを癒しと言っただろうな、としみじみしてみたり。

目的の人物は案外あっさりと見つかった。

金色の長い髪をした女の子は、太い木の枝の上に座って目を閉じていた。

なんというか『画になる。』というのが第一印象だった。

少しイタズラ心がうずいた。……魔が差したともいう。

俺は気配を消し、気づかれないようにフェイトのいる枝まで跳んだ。

こういうことができるって言うのがつくづく自分が人間離れしてきたと思う。

目の前には、安心しきった顔で目を瞑るフェイトがいる。

当然気がつかれていない。

かなり顔を近づけているっていうのにまだ気がつかれていないっていうことに、思わず顔がにやけてしまう。

っていうか、いま目を開けられたら完璧に不審者じゃないか…？

いかん。そんなことになれば話がこじれる。

ここは気がつく前に、こちらから話しかけるべきだろう。　ほら、スマイルスマイル！

「こんにちは。」

ありったけの営業スマイルで挨拶を試みる。

「……………」

目は開いたけれど、いまいち反応が鈍い。

いや、いきなり手に持っているデバイスでぶっ叩かれる展開も嫌だけどね。

「えっと、邪魔したかな…。気持ちよさそうに寝てるように見えただけだ。」

「ううん。寝てたわけじゃないから。でもどうやって私に近づいたの。全然気が付かなかった。」

よかった。会話は普通にしてくれるみたいだ。

「跳んできたんだよ。」

「飛んで…?」

一気にフェイトの警戒心が高まった。きっと魔法で飛んできたんだと勘違いしている。

「そう、ジャンプしてきたんだ。こんな風にね。」

実際に跳んでみせる。

そして一旦地面に降りた後に、再び枝へと戻る。もちろん着地はソフトに柔らかだ。

「すごい…。」

「魔法みたいだろ？」

「……………そう、だね。」

ちよつとわざとらしくかったかもしれない。

ぎこちなく返事を返すフェイトはきつと嘘をつけない子なんだろう。

「君はどうしてこんなところにいるの？」

今度はフェイトのほうから話を振ってくれる。

「えっと、散歩していたら気持ちよさそうに眠っている子がいたから、さ？」

「うん。でも寝てたわけじゃない。」

「そうだったね。それじゃ何してたの？」

「それは……………」

言いよどむフェイト。

ここで『やっぱり寝てただけ』なんて言える器用な子ならば生きるのも楽だろうに。

「当ててみようか？」

「え……？」

「探し物をしてたんだろ？」

「……………ッ！」

再び警戒心が高まる。

「そうだな……、その探し物は……………」

「……………」

「友達…じゃないかな？」

「友…達……？」

「そう。友達。」

「…………私が探しているのはそんなものじゃない。」

伏し目がちに否定の言葉を発するフェイト。

「そうかな…？ 本人が言うならそうなのかもしれないね。」

まったくの蛇足だったけれど、言わずにはいらなかった。

本当にフェイトは寂しい目をしていたから。

「ちょっとお願いがあるんだけどさ……。」

探し物の話でこれ以上掘り下げるつもりは無い。

すぐに話しを変える。

「なに？」

「ちょっとした趣味でさ、物語を作っているんだけど少し聞いてくれないかな。　こういうのは顔見知りの人に聞かれるのはかなり恥ずかしくてさ。」

「うん。」

もちろん物語作りが趣味なんて真っ赤な嘘です。

「それじゃいくよ。……これはある母と娘の物語。　2人の親子は緑は豊かだけれど、何も無い田舎で暮らしていました。　女の子のお母さんはとても優しく、本当に娘のことを愛していました。　そして女の子もそんなお母さんのことが大好きでした。　田舎には本当に何も無かったけれど、女の子はお母さんがいるだけで、他にはなにもいらなかったのです。」

そこで一回フェイトのほうを見る。

その女の子のことを想像してか、穏やかな顔をしている。

先を話してもいいと判断し、物語を紡ぐ。

「ある日、いつものように女の子はお母さんに遊んでもらおうと、お母さんの部屋に行きました。しかし、部屋の中でお母さんは泣いていました。『お母さんどうしたの？』 女の子はお母さんのことが心配になりました。『金の卵が必要な…。』とってきてくれないかしら…。』 お母さんは泣きながら女の子に言いました。女の子はお母さんの為に金の卵を手に入れる為の旅に出ました。」

もう一度フェイトを見る。

今度はあまり表情を読むことは出来なかった。

「女の子の旅はとても危険な冒険になりました。でも女の子は旅の途中で出会った仲間と一緒に数々の危機を乗り越え、遂に金の卵を手に入れました。…………おしまい。」

「…………え？」

唐突に終わった物語にフェイトが疑問の声をあげる。

「ごめん。まだここまでしか作っていないんだ。」

「……そう。」

「……この女の子のことどう思った？」

「幸せになって…ほしいかな…」

「そっか。」

「うん。」

「続きができればまた聞いてくれるかな？」

「うん。」

「……。」

「……。」

困った。

会話がなくなってしまった。

こっいつときに自分のトーク力の無さにホトホト呆れる。

ていうか、俺何しに来たんだっけ…。

アルフがいらないならチャンスッ！とか思っていたけど、全然ノープランだったじゃん。

思いつきでの行動、ダメ絶対！

あー…風呂入った後に、この丁度いい日差しとそよ風はやばい。

眠い…。

- - - おやすみなさい。

「……………んんう…。」

やば…。普通に寝てた。

なんか前にもこんなことあったような。

っていつかなんだか頭が柔らかな感触に……………。

恐る恐る目を開ける。

目の前には、俺の顔を覗き込んでいるフェイトさん。

「うおう……………ッ!？」

思わず飛び起きてしまった。

これは、もしかしくなくても、ひょっとして膝枕ってやつですよ？

いや、なんか日本語がおかしくなっているぞ。

落ち着け！！

こついつのをさらりとスルーできる男になれ！

こんなだから実奈にバカにされるんだ！そんなんじゃいつまでも童貞だねって。

って、おい！なんであいつは童貞なんて言葉知っているんだ。耳年増めっ！

じゃなくて！　落ち着け！！

「起きた？」

「あ、ハイ…おきました。」

思わず敬語になってしまった。

「……………母さんのこと思い出していたんだ。」

「え？」

唐突な事に驚く。

まさかフェイト自身から母親のことを言い出すなんて思わなかった。

「母さんも私のことを膝枕してくれた時があつてね。母さんもこんな気持ちだったのかなって。」

なんだか物凄く自分が子ども扱いされている気がするが。まあいい。

「やさしいお母さんなんだね。」

「うん。」

「俺の母さんも優しくかったんだ。」

「優しくった……？」

「うん。…死んだんだ。俺のせいで。」

「ごめん……。」

「いや、いいよ。それに君には知っておいてほしいんだ。」

「…………どういこと?」

俺のただならぬ雰囲気を観察したのか、フェイトもまた雰囲気を堅いものへと変化させた。

「自己紹介がまだだったね。俺は天宮涼。俺の母さんは、俺と…そしてジュエルシードのせいで死んだ。だから俺は俺のケジメの為にジュエルシードを封印する。」

「…………そう。やっぱり君も魔導師なんだね。」

「驚いた?」

「ううん。そんな気はしていたから。それに、どんな障害があっても私はジュエルシードを手に入れる。」

「知ってるよ。でも、一つ知っておいてもらいたいことがあるんだ。それは『幸せの形は一つだけじゃない』ってこと。」

「…………。」

「今出会ったばかりの俺の言葉じゃまだ君には届かないことは分かる。だからもっと話そう。もっとお互いのことを知ろう。」

「…私の幸せは私が決めるから。それに…、言葉だけじゃ伝わらないよ…。だから私はジュエルシードを…。」

――ドクンッ

「――ッ」

「ジュエルシード！？　こんなに早く…ッ！」

この感覚は確かにジュエルシードだ。

でもおかしい。

原作は所々忘れている箇所もあるが、今は夕方――少なくとも今回のジュエルシードの発動タイミングは夜だったはずだ。

「ジュエルシードは渡さない。」

いや、今はそんなことはどうでもいい。

まずはジュエルシードの封印だ。

一足先に木の枝から飛び立ったフェイトを追いかける形で、俺も飛ぶ。

ジュエルシードの反応を追ってたどり着いたのは山の中を流れる川。

そして、そこで俺達を待っていたのは。

「半漁人…？」

二足歩行する魚だった。 しかもデカイ。

ものすごくシユールな絵だ。 なんだこの脱力感。

『Photon Lancer』

フェイトのほうは、敵を確認するや否や攻撃態勢に入っている。

まずは、ジュエルシードを封印するって事か。

いいね、賛成だ。

フェイトの魔法が、半漁人目掛けて射出される。

「ギョギョギョギョー……!!」

しかし、半漁人は口から吐き出した水鉄砲でフェイトの攻撃を叩き落す。

見かけによらず、フェイトの攻撃を簡単に相殺するあたり少し出来るみたいだ。

俺もそこらへんに落ちている石を拾い上げ、質量操作をして投げつける。

「ギョー……!!」

今度はシユールさの元凶ともいえる2本の足を使って俊敏な動きでかわす半漁人。

どうでもいいが、魚だから叫びがギョー……なわけ？

「ウオ……!!」

半漁人が反撃に出た。

先ほどフェイトの攻撃を相殺した水鉄砲を俺とフェイトに向かって乱射してくる。

しかし、フェイトは俺が攻撃している間に既に次の魔法を用意していた。

「バルディッシュ、サンダースマッシャー。」

『Thunder Smasher』

フェイトの雷撃を伴った砲撃魔法が、水鉄砲を物ともせず半漁人へと向かっていく。

だが、半漁人もそれに反応する。

フェイトの魔法に対抗するように、先ほどまでが比較にならない大きさの水鉄砲を即座に射出する。

拮抗する2人？の攻撃。

「ん…、電気分解…。いいね！」

半漁人の水鉄砲を難なく避けた俺は、すぐさま魔法陣たいきよくずを敷き水壁のドームをイメージする。

水壁で覆うのは半漁人と攻撃が拮抗している点まで。

覆い尽くしたのを確認した俺は、魔法の維持に足を止めているフェイトへと跳ぶ。

フェイトを抱きかかえると共に今度は自分達を覆う水壁を出し、それと平行して半漁人を覆っているドームを圧縮する。

「え…、な、なに…？」

いきなり抱きかかえられたことへ困惑するフェイト。

「少しうるさいから耳塞いでいたほうがいいよ。」

「え…？」

全ての準備が整ったのを確認した俺は、半漁人のいる圧縮されたドームの内部へと点火した。

瞬間。水素と酸素による猛烈な燃焼により起こった爆発で轟音になり響いた。

「やべ…、やりすぎたか？」

予想していた以上の威力に少し自分でも引いた。

水壁の内部で爆発を起こしたとはいえ、その威力は壁を突き破りクレーターを作り出していた。

しかし、目的はちゃんと達せられていた。

爆発の起こった場所には、既に抛り代を失ったジュエルシードが発動した状態で浮かんでいた。

……… 抛り代になっていた魚のことは考えないでおこう。

さて、残るは…

「フェイト……！！！」

「りょうちゃんとあの子…！？」

…封印だけ、と思ったところで人が集まってきた。

「フェイトから離れなッ！！」

抱きかかえていた影響でかなりフェイトの近距離に居た俺にアルフが殴りかかってくる。

それを避けながら、フェイトから離れる。

「なのはッ！ ジュエルシードだ。 早く封印を！！」

「う、うん。 わかったよユーノ君。」

ユーノの言葉に、ジュエルシードを封印しようとするのは。

「……ッ！ させないッ！」

しかしそれはフェイトによって阻まれる。

そのままの流れで、戦闘に突入する2人。

まずい。

ジュエルシードの近くでの戦闘は次元震を起こしかねなかったはず。

「ユーノ！ ジュエルシードの封印は出来ないのか！」

「僕の方じゃ、デバイスがあつてやつとだよ！ でも、涼ならできるよ！なのはが封印出来るから言っていなかっただけで！」

初耳過ぎる。

最初の頃に、デバイスがないと封印できなとかなんとか言っていたくせに！

「どうやるんだ？」

「封印なんて言っているけど、本当はジュエルシードを魔力で無理

やり押さえつけているだけなんだ！ だから思いつきり魔力をぶつけて――！」

おいおい……。それってかなり紙一重な気がするんだが。

「させないよッ！ ジュエルシードはアタシらが捕獲するんだよ！」

いつの間にか狼の姿になっていたアルフから魔法攻撃が放たれていた。

それを避けた俺に、今度はアルフ自身が突っ込んでくる。

その跳躍力、すばやさは確かに獣のそれだが、それだけならば魔法を使うにも値しない。

直前で身体を最小限ずらし、腹の部分へと軽く掌底を打ち込む。

「ガフッ…ゴホッゴホッ…、アンタなにしたんだい…ッ！」

それだけでアルフはかなりのダメージを受けているはずだ。

実際少しよろけて見える。

「種明かしするほど俺は優しくないよ。今は邪魔しないでくれ。」

俺がやったのは、徹<sup>とおし</sup>。

御神流の技の一つで、簡単に言えば内部破壊だ。

これは、まだまだ力が弱かったときに、どうやれば恭也さん相手に有効打を与えられるのかを研究した結果できた技だ。

これを練習しているのを見つけた土郎さんが驚いていたのを今でも覚えている。

そして、そのときから『自分で技を編み出すようじゃ、技を教えないのはかえって危険だ。今から教え込んで扱い方を覚えさせる。』  
というのが土郎さんの方針になったようで、今では色々技も扱える。

中でも徹は得意中の得意だった。得物にすら乗せることが出来る。

そして実戦での有効性も高い。何しろ防御無視の内臓破壊だ。食らえばひとたまりも無い。

「アルフツ!!」

俺の徹<sup>とおし</sup>によるダメージを心配してフェイトが叫ぶ。

構っている暇は無い。今はまず封印だ。

魔法陣<sup>たいきよくす</sup>を出し、魔力を練る。

「大丈夫…ッ！ それよりそんな子に構っていないで早くジュエルシールドを確保するんだよッ！！」

手加減しすぎたのか、はたまた獣ゆえの耐久力か、俺の徹を受けて尚アルフは俺に向かってきた。

今度は徹を使わずに、足を払いその流れで蹴飛ばす。

今のアルフに徹なんか使えば殺しかねないからだ。

だが、相手も必死。

蹴りを受け、飛ばされながらも魔法でこちらを狙って来ていた。

結果的に、アルフの執念によって俺は足止めを食らった。

この足止めは大きかった。

魔法を避け、練りこんだ魔法を繰り出そうとするが、既にフェイト

となのはがジュエルシードへと向かっている。

あちらの方がタイミング的に早いッ…！

「ダメだッ！ 離れろッ！！！」

用意していた魔法をキャンセルし、自分へ質量操作を加え、弾丸のように跳び出す。

間に合わない。

交錯した2人のデバイスにより、ジュエルシードが挟まれる。

一拍遅れ、2人のところへ到達する。

かなり手荒だが、2人をジュエルシードから離す為に蹴り飛ばす。

2人の魔力のぶつかり合いにさらされたジュエルシードからは、既に大量の魔力が溢れ出している。

原作では、小規模な次元震で済んだが、このままではそれで済むとは限らない。

なんとか押さえつけるッ…

ジュエルシードを握りこみ、魔力で押さえつけにかかる。

「グッ……。ダメだ、溢れるッ……。！」

徐々にその大きさを増していくジュエルシードの魔力に、俺の魔力が対抗できなくなっている。

このままでは押し切られる。

「涼！！無茶だ！！早く逃げて！！」

確かにちよつと無茶だ。

でも少し分かった。

押さえつけるんじゃないだめなんだ。

押さえつけるから暴れる。

だったら受け入れてやれ。

暴れる魔力を分解し、受け入れて1つになるんだ。

魔法陣を描いていた灰色の魔力光が、黒色に変化しきれいな対極図を描いていく。

どんどんジュエルシールドから魔力があふれ出してくる。

だが、さっきとは違う。

噛み砕き、受け入れると決めてから、今度はその魔力が俺に流れてきて一つになっていく。

やがて、魔力の暴走は収まった。

そのかわり、ジュエルシールドの姿も消えていた。

「涼！大丈夫！？」

「うん。…ふう…なんとかなったね。」

実際ちょっとやばかった。

でも今ので色々掴んだ気がする。

「アンタ！ ジュエルシードをどこにやったんだいっ！」

アルフが俺に向かって吼える。

「ジュエルシードは、俺の中。 ジュエルシードを分解して、取り込んだ。」

「ふざけてんのかい！ ロストロギアを取り込むなんて、そんなことが出来る人間がいるわけないだろうっ！」

「…いい、アルフ。 もうここにジュエルシードは無い。 帰るよ。」

「フェイト…。でも…。」

「いくよ。」

まだ何か言いたそうにしているアルフだが、フェイトには従って背

を向ける。

「待ってくれ。 フェイト・テストロッサ。」

「……ッ どうして、私の名前。」

なぜ名乗っても居ないのに、自分のフルネームを知られているのかと驚くフェイト。

だが、そんな驚きに答えをあげる必要も無い。

「俺はジュエルシードを封印するし、ジュエルシードを使って起こる災厄も許容することはできない。 でも、俺は君を助けたいとも思っている。 君を助けたいと思う気持ちとジュエルシードは関係ない。 君は友達はいらないと言ったけれど、俺はもう友達だと思っているよ。 知ってるかな？ 友達は困ったときに助け合っただ。 だから何か困ったことがあったら俺のことを頼って欲しい。」

言いたい事は言った。

「……………」

フェイトは、それに応えることなく去っていった。



## 第九話（後書き）

大幅な改稿申し訳ありません。

ご意見・ご感想おまちしております。

## 第十話（前）（前書き）

第九話、10月12日に大幅な改稿をいたしました。

そちらの方を読まないで、今回の話が分からなくなってしまう  
…。

よく推敲をしなかった私のせいでご迷惑をおかけすることを深くお  
詫びします。

## 第十話（前）

ゴールデンウィークも明けて、今日から学校が始まる。

だが、学校へ行くにはかなり早い時間帯に俺は外出していた。

「半月ずっと練習しなかったし、今日からしっかりやろう。」

母さん達が死んで以来、こなしでいなかった朝の魔法の練習の為である。

もっとも、ゴールデンウィークで掴んだことの確認も早くしたいということもあって、俺はいつもよりも更に早い時間に家を出ていた。

いつもの丘の上の公園へと到着し、深呼吸をひとつする。

心を落ち着けたところで、精神を集中させる。

あの時――ジュエルシードを抑えにいったとき、俺は分解と融合を同時に行った。

そのとき感じたのは、同時に行うことがもつとも自然だったということだ。

――魔法を発動させる為に、魔法陣を敷く。

温泉から帰ってすぐに俺は太極図のことを調べた。

そして、自分の感じた感覚にしっくり来る回答を得た。

思ったとおりだ。

今朝の魔法陣は黒色で描かれていた。

「おはよう、涼。 今日から練習再開？」

「おはよう。 ずいぶん長い間疎かにしてたからね、今日からまたよろしく頼むよ、ユーノ。」

満足のいく結果を得られたちょうどそのとき、ユーノとなのはが公園へとやってきた。

だが、なんだかなのはの顔が赤いし、元気が無いように見える。

「おはよう、なのは。どこか調子でも悪いのか？」

「ううん、どこも調子は悪くない…けど。」

どうも歯切れが悪い。

「大丈夫ならいいけど…。調子悪くなったらすぐ言ってくれよ？」

「う、うん。大丈夫だから…。」

おかしい。

今日のなのはは妙によそよそしい。

『なあ、ユーノ。俺なのはに嫌われてる？』

『えっ？ そんな事ないと思うけど…。』

『そうかな？ なんだか妙によそよそしいって言うか、距離を感じ

るんだけど。』

『あー…。きつと距離感が分からなくなっているんだと思うよ。』

『どういうこと?』

『えっと、言いにくいんだけど…。涼のご両親が亡くなって、なのはが思いつめていたのは知っているよね?』

『まさか…!』

恭也さんに、お前が余計なことをすると話がこじれる、と言われたから行動を自粛すると決めていたが、やはりなのはに対するフオロ―を入れなかったのは失敗だったのか…?

『いや、多分涼が考えているようなことじゃない。お兄さんの話を聞いて、少なくとも今は思いつめているようなことはないよ。』

ユーノの否定に、ますます分からなくなる。

『涼はさ、ずっとなのはが一番近くに居たんでしょ? それが問題なんだとおもう。』

幼なじみという意味では、確かにそれなりに近い距離に居たとは思うが、それがどうして問題なのか分からない。

『僕みたいに出会って間もない人間と違って、なのはにとって涼はそこにいるのが当たり前な人間だったんだ。でも、涼のご両親が亡くなったのをきっかけに一旦距離が離れちゃったよね？』

『うん…、まあ…。でも、そうなるはやっぱり今の状態は、俺がなのはを1人にしたせいだよな？』

『勘違いしないで、涼。僕はネガティブな意味でこの話をしていくわけじゃないよ。むしろなのはにとっては良かったんじゃないかなって思ってるよ。』

『良く分からないな…。どうしてそれがいいことになるんだい？』

『離れてみて初めて気が付くこともあるって事だよ。さあ、念話じゃなくて普通に話さないと益々この空気が重くなるよ!!』

気が付けば大分ユーノと念話で話し込んでいた。

そしてそれに気が付くと、如何にこの場が息苦しい無言空間か、ということにも気が付く。

チラリとなのはを見てみると、あちらもこっちを見ていた。

……………すぐに俯いて目を逸らされたけど…………。ユーノ、これは本当に大丈夫なのか？

それに……えっと、何話せばいいんだろ……………？

「そうだ、涼。確か魔法について少し分かったことがあるかもしれないって言っていたけれど、あれってどういうこと？」

な、ナイスだユーノ！！

さすが将来はインテリメガネ！！

「ああ、まずはこれを見て欲しいんだ。」

魔法陣<sup>たいぎよくず</sup>をユーノの前で展開する。

「なにか気が付くことは？」

「気が付くも何も、魔力光が違うじゃないか！ 魔力光は生まれつきのもので変化するなんてことありえるんだろうか……。」

「今までが、おかしかったんだよ。感覚で分かるんだけど、本来の俺の魔力光は黒色<sup>こくしち</sup>だったみたい。今までは中途半端<sup>ちゅうはんぱん</sup>だったから色が薄かったんだ。」

「中途半端……………？」

「そう、中途半端。今まではユーノに言われて、変化とかそういう分野に魔法資質があるんだと思っていただけ、実際はそうじゃなかったんだよ。」

ユーノが分からない、と首を傾げる。

「太極図のことを調べただけ、太極図っていうのは陰陽の思想いんやうにおける陰と陽を表しているものらしいんだ。ああ、陰陽思想っていうのはコッチの世界の古代文明が生んだ思想の1つね。」

ミッドチルダ出身であるユーノにいきなり陰陽とか言っても分からないよな。

「それで、調べて分かったのが、今まで俺が使っていたのは陰陽における陽の性質……融合・同化・集合・編成だったんだ。まあその中でも、編成ばかり使っていたみたいんだけどね。」

「うん。分かったけど、それがどうして中途半端につながるの？」

「ジュエルシードを取り込んだとき、俺はジュエルシードを分解して同化しようとしたんだ。その内の分解が陰陽における陰の性質……拡散・分散・分解・分離の1つだったんだ。」

一旦言葉をきり、ユーノの反応を見る。

さすがにユーノは理解が早いみたいで、相槌を打ってくれている。

「そして、これが一番重要なんだけど、陰と陽は互いに相反しながらも、どちらか一方が欠けるともう一方も存在出来なくなるんだ。

外向き・受動的な陰。 内向き・能動的な陽。 この2つを同時に使うことが俺の本当の魔法だったんだ。 それを理解したからこそ、本来の魔力光が出てきたんだと思う。」

「……なるほど。 今までは2つで1つの力を無理やり1つで使っていたから、中途半端だったって事だね。」

「2つでないと存在できないわけだから、無意識のうちに両方を使っていたんだと思うんだけどね。 ただ、今までは”陽”にばかり意識が行っていたみたい。」

話に一区切りついたところで、ユーノは何かを考え始めた。

「驚いたよ……。 こんな魔法の無い世界ですぐに魔法に転用できるような思想が育っているなんて……。すごいよ、涼！ これは全く新しい魔法体系かもしれないよ！！」

ものすごく興奮している様子のユーノ。

一方全く会話に参加してこなかったなのは、頭に大量の疑問符が浮かんでいる。

それにしても、俺も適当にパケット……もとい参考にしたものがこんな事になるとは思わなかった。

でも、これは嬉しい誤算だ。

力が全てなんていわない。

でも、力がなければ守りたいものは守れない。

良かった、俺はまだまだ上を目指せる。

家に帰った後、実奈と一緒に学校へと登校した。

ゴールデンウィークのような連休明け特有のけだるい空気のなか、授業も既に3時間目まで終了している。

休憩時間は10分だが、わずかな時間でも会話を楽しむのは学校ではどこにでもある風景だろう。

……高校時代は、やってない予習をこのわずかな時間に足掻いてやっていたっけ……。

予習しなくても分かる授業万歳!!

「ちょっとなのは！ 聞いているの!？」

と、そんな平和な時間にそぐわない大声があがる。

そういえば、なのはとアリサが喧嘩するのはこの頃だったっけ？

様子を見ようと、アリサの声があがった方へ顔を向けると、どうしてかなのはと目があった。

すると、急に慌てだすなのは。

「ちょ、ちょっとアリサちゃん、すずかちゃんこっち来てなのっ!」

「なっ……ちょ、いきなり何よ!？」

「え？え？　ちよつとなのはちゃん…！」

あつという間にアリサとすずかを連れて教室を出て行くのは。

あ、あれ？　喧嘩ってこんなだっけ…？

っていうか、授業開始までそんなに時間がないけど大丈夫なのか？

ボーっとなのは達の出で行った出入り口を見ていた俺だが、冷ややかな視線を感じて振り向く。

振り向けば、そこにはジト目の実奈が立っていた。

ちなみに実奈も一緒になのは達と話していたはずなのに、置いてきぼりを食らったようだ。

「えっと、何でしょうか実奈さん…？」

「どうするのお兄ちゃん、あれ。」

あれとは何でしょうか。

なのはですね、わかります。

「友達をあれ呼ばわりは、お兄ちゃん感心しないよ。」

実奈の目がこう告げていた。　ウ・ザ・イ、と。

「前々からそんな気はしていたけど、なのはちゃんお兄ちゃんのと絶対好きだよ。」

「……………はい？」

HAHAHA！まさか、そんなわけ無いだろう！

「HAHAHA！まさか、そんなわけ無いだろう！」

思ったことが思わず口から出てしまった。

そして再び実奈に目で黙殺された。

うん、今のはさすがにキャラが違うと思った。

「今までは自分でも気が付いてないみたいだったけど……………お兄ちゃん、なのはちゃんに何したんですか？」

敬語が耳に痛い。

完全に不機嫌状態だ。

「な、なにもしてないです。」

「ホントに？」

字面だけ見ればなんて事はない言葉だが、実奈の凄みがかなり効いて大迫力だ。

「ほ、ほんとです。」

警察の取調べってこんな感じなんだろうか。

こんなのすぐゲロツてしまいそうだ。

蛇みなに睨おれまれた蛙おれよろしく、竦みあがっていると授業開始のチャイムが鳴り、教師が入ってくる。

助かった。      なんと救いの鐘っ！！！！

その後の授業はなんだか身が入らずに過ぎていった。

そして今は帰りのH Rの時間だ。

『最近この辺りで不審者が出没するようですので……………。』

担任の先生の話を、右から左へと聞き流しながら、なおも悶々とする。

なのはのこともあるが、なんだかかなり原作と違ってきているようだ。

顕著なのは、喧嘩するかと思いきや今まで以上にべったりとし始めたように見える、なのは・アリサ・すずかだ。

どうしてこうなった！

確実に言えるのは、俺が介入し始めた影響だって事だろう。

正直原作はあんまり詳細に覚えているわけではなかったから影響は少ないかもしれないが、それでも何も知らないよりはマシだったはずだ。

…少し不安が残る。

少し1人で考えたくなつたので、HRが終わると同時に脱兎の如く教室を抜け出し街をさまよい始めた。

考えが纏まらない。

というか、なにを考えるべきなのかが分からない。

とりあえず言えることは、PT事件自体は進行しているわけだから、それは解決すべきだってことだ。

それ以外は、白紙。

今までの原作知識に頼つたような行動はすべきではない。

街をあてもなく歩きながら考える。

「まあ、精一杯やるしかない、…かな？」

結局のところ、この結論へ達した。

今あれこれ考えても無駄だと諦めたと言ってもいい。

と、開き直ったところでようやく気が付くことがあった。

………つけられている…？

そこまで人通りの少ない道を通っているわけではなかったが、確かに俺を監視するような視線を感じる。

しかし、こんな白昼堂々と？

しかも、俺は男なんだけど…。

そのとき、HRで聞き流していた担任の言葉がふいに頭に浮かんだ。

『最近この辺りで不審者が出没するようですので………。』

うん……。そういう趣味の不審者がいてもおかしくない。

だが、俺に目をつけたことを後悔させてやろう。

俺は人通りの少ない道へとあえて進んだ。

俺を監視している人物は確かについてきている。

- - - 次の曲がり角で仕掛けよう。

角を曲がったところで、俺は息を潜める。

ところで、目には目をとという言葉を知っているだろうか。

確かどこかの古代文明がやった復讐に関することが起源だった気がする。

いや、今はそんなことはどうでもいい。

俺を追っていた不審者はすぐそこだ。

コイツには如何に不審者と言うものが怖いかを知ってもらう必要がある。

そして、善良なる市民を恐怖に陥れたことも後悔させてやる。

そう、目には目を、不審者には不審者をッ!!!

「くあ w s d r f t g y ふじこ 1 p、みぎよおおおお!!!」

自分でも意味不明な言語を叫びながら、精一杯不審者らしい?ポ―

ズをして躍り出る！！

「……………え。」

「……………。」

え、なんで…。どうしてこうなった？

人通りの少ない道には、いわゆる『荒ぶる鷹のポーズ』に似たポージングのまま固まった俺と、これまたそんな俺をみて固まっている

金髪美少女がいた。

「ふえ、フェイトさん…。なにしてらっしゃるんでしょうか…？」

穴があつたら入りたかった。

## 第十話（前）（後書き）

前書きでも書きましたが、第九話、10月12日に大幅な改稿をいたしました。

もし、今回の話が分からなかった方は、一度読み直していただけると幸いです。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 第十話（後）

「はっ！？ 固まっている場合じゃない！」

「え…？ ちょ、ちよつと……。」

いち早く硬直から復帰した俺はフェイトの手をむんずつと掴んで、  
ダッシュする。

いくら人通りが少ないとはいえ、人目がゼロというわけではなかった。

暫くこの通りは歩けそうにもない。

「なにしてんだ俺…。 鬱だ…死にたい…。」

というか、奇声をあげた上、少女の手を引いて逃げる図ってヤヴァくないですか？

ああ、この歳で犯罪者の仲間入りかも。

どうか通報しないで下さい、見知らぬオバサン……もとい、お姉さん方。

「は、はやすぎ…ッ。と、とまって……ッ。」

「え…？ あ、ごめんっ！」

あまりに必死に逃げていたせいで、フェイトの手を掴んでいたことを忘れていた。

足を止め手を離すと、フェイトは肩で息をして苦しそうにしていた。高速機動が自慢のフェイトも、魔力での身体強化がなければただの女の子ということだろう。

「えっと、大丈夫…？」

「だ、だいじょうぶ…。運動は、得意、だから…。」

息も絶え絶えでそんな事を言われても説得力皆無だが、ここは本人の意思を尊重しよう。

「そう、なら良かったけど…。なんであんなところにいたの？俺のことつけて来ていたみたいけど。」

「はあ、はあ…街を歩いているのを、見つけて、監視してた。」

そこで一旦乱れた呼吸を整え、フェイトは続ける。

「ジュエルシードを探すのを邪魔されるのは嫌だから。」

完全に敵認定されてる……。

まあ、仕方ないとは言え、友達になりたいって言った身としては少し……ねえ？

だから少しふざけてみたくなる。

「歩いている友達を見かけたから、ちよつと声をかけようとした？」

「そんなこと言ってないよ。」

バツサリである。

でも、いつも義妹<sup>みな</sup>に冷たくされている俺にはそよ風程度だ。

字面は怖いけれど、どこかの誰かみたいに悪意の籠った視線をしてないからだ！

「別に俺のことなんて放っておいてジュエルシード探せばいいんじゃないかな？ 俺は自慢じゃないけど、広域魔法探査は全く出来ないから、探し放題だけど？」

あれは良く分からない。

感覚を広げる感じとか言うけれど、そんなのイメージできないっての。

「それならなおさら。 いざ見つけて封印するときになって君が近くに居ると邪魔される。」

ふーん、ずいぶん嫌われたもんだ。

「それじゃ、みつかったんなら逃げないといけないんじゃないの？ 少なくとも一緒にいていいわけじゃないと思うけど。」

「驚いて逃げそびれた…。」

……。

「ねえ、さっきのはなに？」

「さっきのとは何かな、フエイトさん？」

「変な叫び声あげてた、あれ。」

「え？」

「…え？」

とりあえず、ニコニコしておく。

「あの…、聞こえてる、よね？」

「え？ 何が？」

「何がつて…。」

人には触れられたくないことがあるんだ。

あれは全力でなかったことにする。

『フエイトーーーーー!!』

そのとき上からアルフの声が聞こえてきた。  
なんといういいタイミング。

トンツとバックステップを踏んでアルフの踵落としを回避する。

「アルフッ。　まだ治ってないのに無茶しちゃダメだよ！」

「ご主人様がピンチなのにじつとなんかしてらんないよっ！　それにフェイトだって全然休まないじゃないか…。」

「それは……。」

どうやら、アルフは俺にやられたダメージが回復しきっていないらしい。

「心配しなくても、ジュエルシールドが絡んでいないのに仕掛けるほど戦闘<sup>バトル</sup>マニア<sup>マニア</sup>じゃないよ。　むしろジュエルシールド関連でも戦いたくないくらいだ。」

両手をヒラヒラと振りながら、手をださないとアピールのジェスチャー<sup>ジェスチャー</sup>をしている。

「信用できないね。　アンタがアタシにやったことを覚えていないのかい！」

確かに。

怪我を負わされた側からしてみれば当然の主張だ。

「ちょっと落ち着いてくれ。戦いたくないのは本当だ。」

「まだ言うかい！」

まずいな、アルフが来たせいで一気に戦う空気になってしまった。

「アルフ待つて。私も戦いたくないんだ。」

だが、それはフェイトに止められた。

「フェイト……？」

フェイトが顔を伏せる。

表情が読めない。

「今度戦ったら、きっと私は最期まで……。どちらかが倒れるまで戦い続けるから。」

……つまり殺すか、殺されるか。

そこまでの覚悟をしているってことか？

思えば、今日のフェイトの行動はとても合理的とはいい難い。

俺のことを追い、邪魔されたくないと言ったのは、本当は戦うことが嫌だったから？

……フェイトの様子がおかしい。

「なにかあったのか、フェイト・テストロッサ？」

「……………」

沈黙するフェイト。

だけど、それは肯定の意味だ。

そして、フェイトにこれだけの影響を与える人間は、俺には1人しか思い浮かばない。

『アルフ。 フェイトはプレシア・テストロッサに会いに行ったのか?』

『なっ!? アンタなんであの女のことッ…!』

『いまはそんなことどうでもいいだろ。 どうなんだ。』

『アタシは、アンタにやられた怪我のせいでさっきまで寝てたんだ…。 だから分からない…。』

自分のせいとはいえ、失望した。

確実に確認する手段がなくなった。

フェイト本人には直接母親の話はしない方がいい。

今のフェイトに余計な刺激は与えたくない。

俺がプレシア・テストロッサのことを知っていると分かったら、戦闘へまっしぐらな未来しか見えない。

……いや、確かめられる。

「ごめん、すこし痛いかもしれない。」

俺は一気にフェイトとの距離を詰めて、服で覆い隠されている部分へ少し力を籠めて触れる。

「ッっ……………」

フェイトは我慢しようとしていたが、不意打ちだったこともあり、痛みを隠しきれていなかった。

一瞬で頭に血が昇った。

虐待があるとは分かっていたが、実際にこの目で見るとどうしようもなく頭にきた。

「…………ッ、ふう……………」

だが、俺がここでキレても意味がない。

深く息を吐き出し落ち着く。

フェイトの意志を無視した暴走は、フェイトを傷つける結果にしかない。

「なあ、フェイト・テストロッサ。この前、お話が未完成だった

言ったのは嘘なんだ。　本当は最後まで出来てる。」

「え……?」

なぜ今その話が出てくるのか分からないフェイト。

「金の卵を仲間と共にお母さんの下へと持ち帰った女の子は、これで昔の優しいお母さんに戻ると思っていました。ですがそんな思いは裏切られてしまいます。女の子が持ち帰った卵は怪物の卵でした。そしてお母さんは、孵化した怪物の餌に女の子とその仲間を選びました。」

「……………」

「しかし、怪物は一番最初にお母さんを食べました。女の子は泣きました。裏切られても女の子はお母さんのことが好きだったのです。女の子とその仲間は、力を合わせてその怪物を倒しました。女の子は誰より大切だった人を亡くしましたが、気が付けば女の子の周りにはその人とも比べられない大切な人達がいました。女の子は仲間と一緒に幸せに暮らしました。…おしまい。」

我ながら下手な話だと思う。

「君はこの女の子に幸せになってほしいって言ったね?　多分、君

が想像したような幸せじゃなかったかもしれない。でも、女の子は最後には幸せだったんだ。前にも言っただけけど、もう一度言っよ。『幸せの形は一つだけじゃない』んだ。」

フェイトの頭に手を置き、ぽんぽんと撫でる。

「俺はいつでも君を助けに行く。だから、必要になったときは俺の名前を呼んでくれ。辛くなったから話を聞いて欲しい、とかでもない。とにかく呼んでくれ、”涼”って。」

頭を撫でられて俯いていたフェイトが顔をあげ目が合う。

心の中はプレシア・テストロッサへの怒りでいっぱいだったけれど、ここでそれは悟られてはいけないと思った。

だから、思いっきり笑ってやった。

「あ……………」

少しはフェイトに対して気持ちが伝わったと思う。

フェイトも何か言おうとしていた。

が、それは遮られた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラOWNだ。君達には聞きたいことがある。同行願おうか。」

「管理局！？やばいよフェイト…ッ！」

「ッ……！」

どうして管理局が……？

いや、そんなこと今はいい。

突然の管理局の登場に驚いているフェイトたちをどうにかしないと。

『2人とも早く逃げろ！ 今管理局に捕まれば君達にとってはどうな結末であれ、後悔しか残らない！』

『でも、管理局の奴らが！ こいつらはプロだよッ！？』

『この執務官は俺が抑える。 追跡の方は良く分からないから、そ  
ちで何とかしてくれ！』

『わかんないって、無責任な奴だねッ！！』

『いいから早く行けっの!』

悪態をついていたアルフだったが、フェイトとタイミングを合わせて飛び立った。

「待てッ!」

当然のようにそんな2人に反応するクロノ。

既に5発の魔法を放っている。

さすがに腕がいい。

こちらも火玉を5つ作り出し、アルフとフェイトに向かう魔法を相殺してやる。

「何をしているんだ君は!」

「それはこっちのセリフ。いきなり出てきてなにしてんだよ。」

「ツク、時空管理局だ。邪魔をしないでくれ!」

と言って、また攻撃を放つクロノ。

「だから、管理局なんて知らないっていつてるんだよ!」

今度は雷撃で相殺する。

ついでに管理局のことは知らぬ存ぜぬを貫く。

これなら公務執行妨害って言われても言い訳たつ……よね……?

「クッ…、逃げられた…。」

良かった。

フェイトたちは無事に逃げおおせたようだ。

後は、大人しく事情聴取をされて……

「君には話を聞かせてもらうつツ!」

ってなんで襲い掛かってくるんだよ!?

「物騒なやつだな！」

横薙ぎに振るわれる魔法杖を掻い潜り、懐へもぐる。

近接戦闘を挑んでくるとはいい度胸だ。

反応したクロノが左足で蹴りを放つが、ぬるい。

左手で蹴りを止め、ついでに動けないようにした上で、右手で掌底を叩き込む。

そのまま流れを利用して回し蹴りを放ち、クロノを吹っ飛ばす。

「あ……………」

思わず身体が反応してやってしまった。

これはまずいんじゃないだろうか？

徹とおしは使っていないから大丈夫だろうけど。

「大丈夫ですかー…？　話は聞きますから、怒らないで…。」

「ック…。どっちが物騒なんだ。ロツテ並に手加減がないぞ。」

「いや、身体が勝手に反応してしまつて。　　すみません。」

「……いい、今のは僕にも過失があつた。　　ついてきてくれ。　　話を聞くんだろう?」

「あ、はい。　　わかりました。」

大人だ……。

普通、殴られた上蹴り飛ばされてこんなに平静としていることが出来るだろうか。

というか、俺も大分反抗的な態度だったから、クロノに逃げると勘違いされてもおかしくなかった。

そう思うと、急に自分が物凄く悪く思える。

「あの、さつきはすいませんでした。　　あの態度じゃ逃げると思われても仕方なかったと思います。」

俺がそう言つと、クロノがジッとこっちを見てきた。

「えつと、何か?」

「いや、なんでもない。　　転移するぞ。」

転移しながら俺は考えていた。

管理局が介入してきたからには、ジュエルシードを巡る戦いももうすぐ終わるだろう。

だけど、俺はプレシア・テストロッサをどうすればいいのかわからなかった。

もちろん、おれ個人は今すぐにもぶっ飛ばしたい。

でも、それはフェイトの意志を無視することになる。

これはフェイトの問題、彼女に選ばせるべき問題だ。

しかし、俺にも守るべきものはある。

もし、被害が俺の守るべきものへと及ぶようならば……。

アースラへと到着し、俺はネガティブな思考を打ち切った。

## 第十話（後）（後書き）

補足という名の説明能力のなさの証明

フェイトが持ち帰ったジュエルシールドは2つ。

原作では4つだったことを考えても、プレシアさんの虐待はかなりひどいことになっています。そして敵対者を排除しろっていうことも強く言われています。

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 第十一話（前書き）

い、いそがしい…。

## 第十一話

管理局がやってきたのは、次元震の予兆を観測したかららしい。

俺は押さえ込んだと思ったけれど、それでも次元震は起こりかけていた。

「気持ちの整理もあるでしょうし、今晚ゆっくり考えて決めるといわ。」

いま目の前にはハラOWN親子がいる。

丁度いま、ロストログァのことや今回の事件の全権を管理局が持つことについて説明を受けた。

ちなみになのは達は呼んでいない。

「リンディさん、もう僕の答えは決まっています。」

いまさら一晩考える必要なんて無い。

「僕を管理局員にしてもらえませんか？」

これはずっと考えていたことだ。

「君はいきなり何を言い出すんだ！　どうしたらそういう結論になる！」

まあ普通に考えたらいきなり、局員にしてください！！は飛躍しすぎだな。

「言っておきますけど、冗談でもなんでもないですよ。僕は本気で管理局員になりたいと思ってます。」

「……理由を聞かせてもらえるかしら？」

リンディさんは俺の雰囲気から冗談ではないことを察してくれたらしい。

管理局提督としての顔になり訊ねてくる。

「ジュエルシードを探している理由は既に話しましたね？　自分が両親を殺したからだって。先ほどは言いませんでした<sup>みな</sup>が、自分には義妹がいます。僕はあの子を守らなければならぬんです。ずっと傍に居てやるって約束したから。」

「それがどうして管理局入局なんて話になる。」

クロノの疑問ももつともだ。

「クロノ執務官、義妹を守るとはどういうことでしょうか？ 今はジュエルシードの危険に晒されていますが、本来僕等が住んでいる土地は治安のいい場所なんです。戦争があるような国ならともかく、ここでは文字通り身を守るなんていうのはナンセンスですよ。」

これからまだ闇の書なんて物騒な物が発動したりするが今はいい。

「では、守るといふのはどういうことか。僕はこう考えました。

『未来を守ること』だと。両親を失ったことで様々な我慢を強いられるのは分かります。世の中なんてそんなものです。ですが実奈には俺のせいで、本来ならしなくても良かった我慢なんかさせたくない。そのために必要なものは、汚い話金です。もちろんそれが全てではないって事は分かっていますが、金がなければどうしようもないことが世の中溢れています。」

「そのための管理局員か？」

「そうです。クロノ執務官をみて時空管理局ならばと思いました。」

子供でも働くことが出来る所なんて、この国のどこを捜してもありません。」

「僕はこれでも14歳なんだけどな！」

「14歳もこちらの世界では立派な子供です。平和を守るなんて崇高な思いを抱いている人にしてみれば、俺みたいな不純な動機の人間は許せないでしょうが、俺は本気です。どうですか、リンディさん。」

リンディさんは真剣な表情で考えている。

やがて結論が出たのか、口を開く。

「りょう君、あなたの言っていることは分かります。義妹さんを守りたいというその志は決して不純なものなんかではないし、凄く立派だわ。でも、あなた自身のことを勘定に入れていないのはいけない事だわ。この仕事には危険が付き物です。大切な人を失ったことのあるあなたなら分かるはずですよ。『大切な人に先立たれること』の悲しみを。自分のことを大切にできない人に、この仕事を勧めることなんて私にはできません。」

「……………」

言葉に詰まる。

先立たれることの悲しみ。

リンディさんの言葉の重みが分かる。

そうか…、この場にいる全員が大切な者を失った人間だったんだ。

「ならば分かります……、大切な人を守れなかった苦しみを。それは自己満足だと言われるかもしれないですが、自分は守れない方が嫌です。」

だけど、ここでひいてはダメだ。

なんとか食い下がる。

「……………」

「……………」

もはや睨みあいだ。

俺は目で自分が本気であると伝える。

「はあ…、分かったわ。そこまで言うなら、テストしましょう。どうせジュエルシードの搜索も協力させると言うんでしょうし。実力は把握しておきたいところだわ。」

いや、まあその通りなんですけど。

「内容は、魔法戦闘でいいわね。クロノ執務官お願いできるかしら。りょう君もそれでいいわよね？」

「はい艦長。」

「もちろんです。僕も一流の魔導師との戦闘経験を持ちたいと思っていましたから。」

「……………」。もう僕はさっきみたいな遅れをとるつもりはないからなっ！」

あ…、やっぱりさっき吹っ飛ばされたこと気にしていたのか。

「あらあら、クロノったらこんなに負けず嫌いだったかしら。それじゃ、訓練室に向かってください。私は別室でモニターしているわ。」

アースラ内の訓練室へとやってきた。

さすがに室内ということもあって、空中戦をするほどの広さは無い。

まあ、それでも十分なスペースがあるのだが。

十数メートル離れた場所ではクロノがデバイスを持って立っている。

少し呆れ顔に見えるのは勘違いではないだろう。

「…もしかしたらと思っていたが、君はデバイスを持っていないのか？」

「ええ、まあ…。」

正直今まであんまりいらなかったなあ。

だが、今回のクロノとの模擬戦次第では必要性を感じるかもしれない。

「同員の標準装備の魔法杖ぐらいなら貸せるが？」

「いや、いいです。 そんな慣れていないもの使ったらかえって邪魔です。」

「そうか、君がそういうならいいが。 …… だけど、せめてバリアジャケットぐらい着るんだ。」

「え……？」

……………。

「まさか君は、バリアジャケットもない。 なんていうんじゃないだろうなっ！」

「いや、そのまさかだったり……。」

あ、クロノがこめかみをピクピクさせている。

正直使える魔法を模索するばかりでバリアジャケットとか忘却のかなただった。

ユーノ達も何も言わないし、全然気が付かなかった。

「大丈夫です！ あたったら終わり！ ぐらいの緊張感があるほうが動きがよくなりますから！」

「大怪我しても、僕の責任じゃないからな!!」

バリアジャケットか…。

これが終わったら考えよう。

『2人とも準備はいいみたいね?』

スピーカーからリンディさんの声が聞こえてくる。

どこかで見ているだろうリンディさんに向かって、俺とクロノは頷く。

『よろしい。 それでは、テスト開始!!』

リンディさんの号令と共にクロノの魔法が発動する。

『Stinger Ray』

フェイトたちを狙った魔法と同じだ。

俺はそれを見て、逆に魔法の方へ……クロノに向かって跳ぶ。

クロノの魔法の弾は全部で5つ。

しかし、直撃コースは2つのみで、3つは回避する方向を先読みしたかのような軌道をとっている。

俺は跳びつつ、その2つを最小限の動きでかわす。

殊、避けることに関しては俺は誰にも負けるつもりは無い。

伊達にあの戦闘民族の化け物たちにしごかれているわけではない！

クロノには攻撃をすり抜けてくるようにすら見えているはずだ。

クロノに迫る。

だが、クロノは同じ魔法を今度は地面に向かって放つ。

魔法はそのまま訓練室の床を穿ち、爆発を伴って粉塵を発生させる。

俺は粉塵を嫌って、進路を変えて右に跳ぶ。

だが、そちらには既にクロノの仕掛けた攻撃魔法が待っていた。  
さっきの魔法を待機させて使っているようだ。

クロノのほうをちらりと見る。

既に次の魔法を待機させている。…それも威力の大きそうな。  
この魔法で足止めしつつ、本命の魔法で落とすということか。

俺は脚を止めずに、再び魔法の方へと踏み込みこれも回避する。

『Blaze Cannon』

直後クロノの大威力魔法が放たれた。

スピードを殺さずにトラップを通り抜けた俺は、そのまま駆け抜け  
避ける。

どうやらクロノはこのまま俺を近づけずにミドルレンジで戦うつもり  
のようだ。

丁度いい。しばらくクロノの距離に付き合おうとしよう。

攻撃を肌で感じることは、今後決して無駄にはならないはずだ。

「クロノは攻めあぐねているようね。」

画面の中で戦う自身の息子と、管理外世界で出会った少年を見ながらリンディは呟く。

「クロノ君がこんなに攻撃を外すのなんて初めてみましたよ。それにあの子魔法を使っている様子もありませんし、凄いですね…。」

アースラスタッフとしてクロノと数多くの任務をこなしてきたエイミィも、様々な計器を操作しつつ驚きの声を発する。

「変わった術式を使っていたから、様子を見るつもりだったけれど……。これは予想していなかったわ。」

いまま画面の中ではクロノの攻撃をかわし続ける涼の姿がある。

普通に見れば、クロノの攻めに反撃が出来ないように見えるほどの戦況であつたが、2人の対照的な表情が決して見たままの状況ではないことを語っていた。

攻められている涼は楽しそうに。

攻めているクロノは苦虫を噛み潰したような表情で。

「ッ！ 魔法を使うようです艦長！」

変化はすぐに分かった。

ミッドチルダ式の魔法陣とは似ても似つかない独特な魔法陣が涼の足元に浮かんだからだ。

「グッ……。なんだこの魔法は……。」

俺の前には地面にへばりついているクロノがいた。

「拘束魔法なんて使えないからこうするしかなかったんだよ。」

十分クロノの攻撃を見たと感じた俺は、即興でクロノの攻めをアレンジして攻勢に転じた。

その際に使用したのは、水と質量操作の魔法。

盛大に水をかぶせて、質量操作でクロノを地面に這い蹲らせたのだ。

実際に質量が発生する水と、質量操作の魔法のコンボは汎用性も高くかなり重宝している。魔力消費も少なくて済む。

『そこまでのようね。 予想以上だったわ、りょう君。 ……テストは合格と言うしかないわね。』

リンディさんがスピーカーから告げる。

しかし、歯切れが悪い。

『テストは確かに合格だわ。 でも、前言を覆すようで悪いけれど、りょう君にはもう一度良く考えて欲しいの。 確かに能力は管理局執務官を寄せ付けないほど…… 人材不足の管理局としても歓迎したいところだわ。 でも何度も言うように自分の将来を決めるのにそんなに急ぐことを、私はして欲しくないわ。 だから、このロストログアを巡る事件が終わったときにまだあなたが管理局入局を望むならば、その時にまた話し合いましょう。』

結局はお茶を濁すような終わりか。

まあ、このままこちらが意固地になっても意味は無いだろう。

「はい。わかりました。」

『ジュエルシードの搜索への協力は許可するわ。 ただし条件があるわ。 私の命令には必ず従ってもらう。 いいわね？』

「了解です。 ……ただ、先ほど一緒に居た搜索者の対処には自分を

起用してもらいたいです。それを約束してもらえらなら、まだ話していない事情を説明したいと思います。」

完全な操り人形になるつもりは無い。

ある程度の裁量は認めてもらわなければならない。

『私もこの艦を預かる身として簡単に判断を下すわけにはいかないわ。その事情とやらを聞いてからでないとどうとも言えないわ。込み合った話になりそうだし、もう一度話し合いの席を設けましょうか。クロノの魔法を解いて先ほどの部屋にもう一度来てもらえるかしら？』

そつえばクロノの魔法を解くのを忘れていた。

質量操作を解き、ついでに火の玉を出し服を乾かしてやる。

「分かりました、リンディさん。ただ、今度の話は僕の仲間も呼んで話そうと思います。」

なのはとユーノを呼び出す旨を伝える。

管理局入局云々の話は両親の話とかも出るせいであまりなのはの前では話したくなかったが、ここからはあの子達も当事者だ。話しておくべきことだろう。

俺の申し出にリンディさんもすぐに了承くれた。

――PT事件は急速に終わりへ向かっていた。

## 第十一話（後書き）

忙しいわ、急に寒くなって体調悪いわでつらいです…。

ご意見・ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9745n/>

---

転生しちゃいました

2011年9月8日07時08分発行